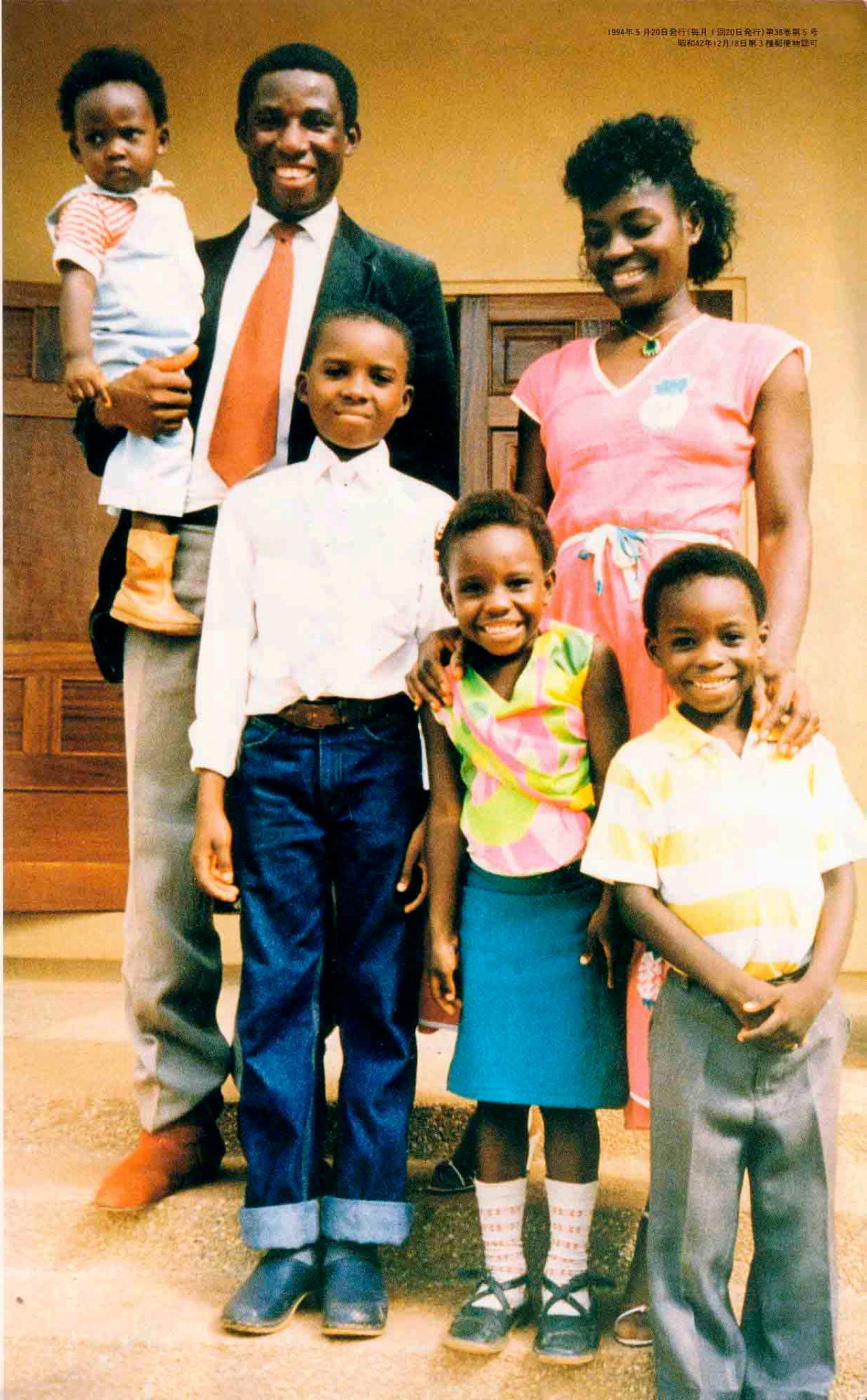


聖徒の道

5

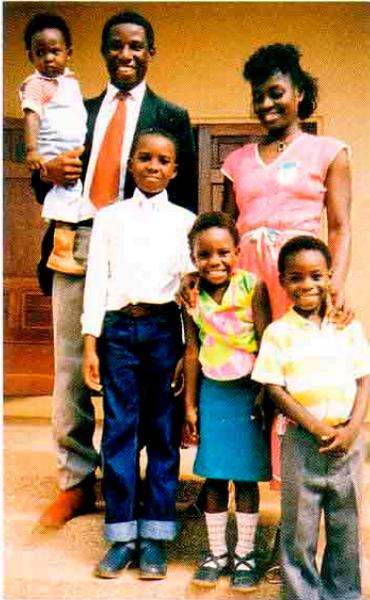
1994



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1994年5月号



表紙——ガーナのクマシに住むハリー・ソーボンとエリザベス・ソーボン夫妻とその家族。(子供は左から、アイザック、ハリソン、レイチェル、ベンジャミン)
裏表紙——ガーナのケープコースト(左上)、ナイジェリアのふたりの若い会員(右上)。ガーナ・ケープコーストステーク部タコラディワード部のアロン神権の教師たち(下)。長い準備の年月の後、アフリカで福音が急速に広まっている。(本誌「備えられた人々」p.32、「アフリカの福音の開拓者たち」p.36参照。写真撮影/E・デール・ラバロン)

こどものページ——レベッカ・ファバレットはイタリア中部にある学校までバスで通っています。レベッカのお話は14ページの「友だちになろう」にのっています。写真提供/ファバレット家族

一般

- 大管長会メッセージ——信仰という鍵
第二副管長トーマス・S・モンソン……………2
- 大きな方に助けられて カサンドラ・リン・ツァイ……………9
- 性的に清い生活を送れるよう若人を助ける
ジョイ・サンダース・ランドバーク……………18
- あの夜に感じた平安 アナ・モーラ・モンテレー……………26
- 備えられた人々——アフリカの末日聖徒の芸術作品と記録的写真
マージョリー・ドレーパー・コンダー……………32
- アフリカの福音の開拓者たち E・デール・ラバロン……………36

青少年

- 努力が生んだ芸術 ジャネット・トーマス……………12
- 「ぼくがモルモンだってわかってるだろ」 フィル・レシュケ……………16
- 若人の広場……………28
- 永遠に至る旅 リサ・A・ジョンソン……………46

定期特別記事

- 読者からの便り……………1
- 家庭訪問メッセージ——バプテスマの祝福に一層深く感謝する……………25

こども

- スペンサー・W・キンボール ケリー・リックス・アダムズ……………2
- フランゴしまいと神でん ジョセフ・B・ワースリン長老……………4
- おもちゃばこ——せい書のたし算 テリー・リード……………5
- 本当のあかし リネット・バーク・ヘール作……………6
- 分かち合いの時間——天のお父さま、かんしゃします
ジュディ・エドワーズ……………10
- ちいさなみんなのために——とくべつなかり
バージニア・フロサイト……………12
- 友だちになろう——イタリア、シエナに住むレベッカ・ファバレット
ディエーン・ウォーカー……………14

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

編集長：レックス・D・ピネガー、ジョー・J・クリステンセン

顧問：ウィリアム・R・ブラッドフォード、ペンサー・J・コンティ、ジョン・H・グロバー

教科課程管理部責任者

実務部長：ロナルド・L・ナイトン

企画・編集ディレクター：ブライアン・K・ケリー

グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーク

機関誌グラフィックスディレクター：M・M・カワサキ

国際機関誌

編集主幹：マービン・K・ガードナー

編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

編集補佐/こどものページ：ティエーン・ウオーカー

工程管理：メアリーアン・マーティンデール

アートディレクター：スコット・パン・カンペン

デザイナー：シェリー・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン、ジェニファー・ダットワイラー、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

予約購読スタッフ

購読管理ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

配送部長：ジョイス・ハンセン

マーケティング部長：ケント・H・ソレンセン

聖徒の道 1994年5月号第38巻第5号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106 東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 精興社/クロスロード

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

普通号150円、大会号350円

Copyright © 1994 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1991年10月 翻訳承認—1991年10月 原題—International Magazines May 1994. Japanese. 94985 300

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理本部配送センター ☎044-811-0417

すばらしい宝物

私は家族とともにアンナベルクブフホルツに住んでいます。ここは1990年までは共産主義のドイツ民主共和国に属していました。

以前は教会の機関誌を輸入することは政府によって禁じられていたので、ドイツ語版の機関誌「デア・シュテルン」(「星」の意)を手に入れることはできませんでした。

しかし、西ドイツに住む教会員が教会書籍共同購読会を通して本をこちらに送ってくれることは許可されていました。彼らはこれに伴うすべての費用を支払わなければならず、個人的に犠牲を払ってくれていたのです。おかげで毎月、私たち家族は教会に関するすばらしい本を受け取ることができ、福音をより近く感じることができました。

大管長会とドイツ民主共和国政府との間の協調が深まったおかげで、ようやく規制が解かれ、「デア・シュテルン」を購読できるようになりました。その時は、皆大喜びでした。私の家族もこのすばらしい宝物を受け取るのがうれしくてしかたありませんでした。

どの号にも、家族一人一人にとって価値のある事柄を見いだしています。教会幹部による説教や記事は、霊的に大きな力をもたらし、毎日の生活の中で励みとなっています。

私は特に世界のほかの地域に住む聖徒たちの記事を興味深く読んでいます。世界じゅうの聖徒たちが福音にそった道を歩もうと努力しているのを知るとは、私自身が鉄の棒にしっかりとつかまるための助けとなっています。

ドイツ、ドレスデンステーク部
アンナベルクブフホルツワード部
モニカ・ミエチニコブスキー

特別な機関誌

「リアホナ」(スペイン語版)に感謝しています。これはほんとうに特別な出版物です。

私たちはいつも「リアホナ」に掲載される記事を使って家庭の夕べを行っています。教会での話の責任でも、大管長会メッセージを基に話すことがよくあります。

子供たちは「こどものページ」が大好きで、ファイルにとじて残しています。

メキシコ、グアダハラハラ・レフォルマステーク部トナラワード部
J・イグナシオ・ロベス家族

再活発化

約7カ月の間、私は教会の活動から遠ざかっていました。

しかしそんな時、私は「リアホナ」(スペイン語版)を注意深く読むようになり、教会幹部の勧告がとても力強く説得力をもって迫ってきました。

私自身のこのような経験から、現在教会にあまり活発でない兄弟姉妹にお勧めしたいと思います。教会機関誌や聖典に記されたメッセージを読み、研究してください。へりくだった心でそうするならば、証は強まり、教会に戻りたいと願うようになるでしょう。

ウルグアイ、イスラパトルーラ
クリスチーノ・ロドリゲス

The *Seito no Michi* is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price \$9.00 a year. \$1.00 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to *Seito no Michi* at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.



信仰という鍵^{かぎ}

第二副管長
トーマス・S・モンソン

何年か前、教会幹部に召される以前のことで、私は恵まれて、神権系図委員会の一員として働く召しを受け、各地のステーク部や伝道部を訪問する特権を得、この神聖な事柄について教会員と話をさせていただきました。それは教会のさまざまなプログラムの中でも最も誤解されているものかもしれません。

亡き親族の記録を探求し彼らのためにどうしても必要な儀式を行なう、という教会員一人一人に課せられた責任を理解するには、系図の専門家になったり、80歳になるまで待ったり、系図学者になったりする必要はないと教会員にわかってもらうこと、それが当時の私たちのおもな責任でした。

家族歴史の探求は特に選ばれたごくわずかな人々が行なうものであり、普通の教会員には無縁のものという風潮が、これまでもありましたし、また現在もあると思います。当時私たちは何度か大会を開きましたが、大会の成果を知るうえで重要な指標となったのが系図を整える業の進展でした。現在も、教会全体で家族の系譜に対する認識は高まっています。

私の先祖の家系は、いくつかの異なる国々にその流れをたどることができ



「私は今まで、絶対にしなかったことをしようとしている。」
管理人は言いました。「この鍵をあなたがたに貸そう。」

ます。スウェーデンからの家系がある一方、スコットランドやイングランドからの家系も混じっていて、各世代で異なった姓が用いられるという面倒な問題もあります。ですから私の場合も、亡き先祖の探求については、それを行なう人が経験するあらゆる問題やチャレンジを同じように受け継いでいると感じています。

私のスウェーデンの家系を見ると、祖父の名前はネルス・モンソンですが、曾祖父の姓はモンソンではなくモンス・オークソン、さらにその上の代はオーク・ペダーソン、ピーター・モンソンと続き、ここでモンソンに戻っています。その上の代になるとモンス・ルースティックという名の先祖です。これはスウェーデンの軍人の家の姓です。彼らが軍隊に入った時に、ピーターソン家、ジョンソン家、モンソン家などと互いに区別するための姓です。

このような込み入った問題があったにもかかわらず、私は自分たちの親族がこの家系について達成した成功の記録に驚いています。私たちは、コンディー家とワトソン家という、母方の家系についても同様の成功を見ました。

ある時、私は妻と一緒にスウェーデンの地を訪れ、スメディエバックケンという小さな村に行きました。かつて妻の父は、11人の兄弟姉妹、両親とともに、その村にあった2部屋だけの小さな農家に住んでいたのです。私は、そのすばらしい家族に福音を伝えたのが私自身の大切なおじであったことに心から感謝しています。私は心の中で、その時の宣教師たちが、暖炉の前に座って慣れない食物を食べながら、親切ではあっても多少は疑いの気持ちを秘めた人々とあいさつを交わし、天の光が互いに理解を得させキリストの福音への改宗に導くよう、ともに祈っている様子を想像してみました。そして天父の助けに感謝しました。

私たちが訪問したところのスウェーデンの伝道部長は、妻のいとこに当たるリード・ジョンソンでした。私たちは彼と一緒にスウェーデンの各地を訪れ、ある時、ルター派の大きな教会に行きました。その建物に入って行く



PAINTING BY HAROLD COPPING

アブラハムが信仰を試されている時には、彼の目に映るやぶの中に雄羊がいなかったのは、大切なことではなかったでしょうか。信仰という鍵は、人々が望み必要としている祝福を受けるための前提であることが、聖典の至る所で証明されています。

時、ジョンソン伝道部長がこう言いました。「私と同僚のリチャード・ティンプソンが、1948年の伝道の最後に、この町でした経験には興味を引かれることでしょう。」

彼の話の内容は次のようなものでした。「私たちがここへ来たのは、自分たちの家系の歴史がここで記録され、伝えられていたと聞いたからです。この大きな教会に入った時、私たちは随分冷淡な古文書管理人に会いました。私たちは、伝道を終え残された短く貴重な日数の中で、彼がこの教会で管理している記録を調べたいと思っています。それを話しました。彼はすぐに、この大切な記録は今までだれにも見せたことはない、ましてや、モルモン教徒に見せるなんてとんでもない、と答えてきました。そして、記録は厳重に保管されていると告げてから、保管庫の大きな鍵を差し上げ、それを眺めるようにして言い

ました。『私の仕事と将来、そして私の家族の暮らしは、私がどれほどりっぱにこの鍵を管理するかにかかっている。まことに残念だが、この記録を調べさせるわけにはいかない。もしこの教会を見たいというなら、喜んで案内しよう。建物や周りの墓地を案内するのは一向に差し支えない。だが、記録はだめだ、これは神聖なものだから。』

ジョンソン伝道部長は、それを聞いてほんとうにがっかりしたそうです。しかし彼はその管理人にこう言いました。「では、せっかくですからお言葉に甘えて、教会を見せていただきますよ。」この間、伝道部長と同僚は、なんとかしてこの管理人の心が変えられ、記録を見せてもらえるようにと、熱心に祈っていました。

かなりの時間をかけて教会の墓地や建物を見た後で、その管理人がふたりに思いがけないことを言いました。「私は今まで、絶対にしなかったことをしようとしている。これで自分の仕事を失うことになるかもしれない。しかし、この鍵を15分間あなたがたに貸そう。」

ジョンソン伝道部長は心の中で言いました。「15分。15分でできるのは扉を開くことくらいだ。」

管理人はふたりに鍵を渡しました。鍵を開けたふたりの目に入ってきたのは、系図を書くうえで計り知れない価値を持つ数々の記録でした。やがて15分がたち、管理人が戻ってきました。彼が見ると、ふたりはついに手にした貴重な記録を前にして驚きに包まれたままの状態でした。

ふたりが言いました。「もう少し時間をいただけませんか。」

管理人は「どのくらい」と聞き返して、時計に目をやりました。

「3日くらいです。」

「そんなことは一度もしたことはない。しかし、理由はわからんが、あなたがたは信用できそうだ。さあ、あの鍵だ。渡しておこう。終わったら、私に戻しなさい。私は毎日、朝の8時と夕方の5時にここに来るから。」

このふたりの宣教師は3日続けて、今私たちが手にし

ている情報を調べ、書き写しました。それらはほかの方法では入手できないものでした。ジョンソン伝道部長は感激した面持ちで、その時の体験を私たちに話してくれました。「主はそのくすしきみ業をなすために、不思議な方法を用いられるのです。」私は彼のその証の言葉を聞いた時に、彼の体験は私たち夫婦にとっても祝福になったのだ、と気づきました。というのは、ふたりの宣教師が得た情報の多くは、幸いなことに私たちの家系にもつながりのあるものだったからです。

私はその古文書の管理人がふたりに渡した鍵のことについて考えていました。その鍵は、彼らが求めていた人々の名前を明らかにする扉を開けました。しかし、それよりももっとすばらしい鍵があります。それは、私たちのだれもが熱心に求めている鍵、私たちがなんとかして得たいと願っている知識の宝庫の扉を開ける鍵です。それは信仰という鍵です。このみ業において、それなくしてはいかなる扉も開けられません。

私たちが、自分たちの前に示されているみ業を成し遂げるために、力の限りを尽くすなら、主は私たちが求めてやまない宝庫の扉を開くのに必要な、神聖な鍵を与えてくださることでしょう。(イテル12:6-22参照)

神権系図委員会が最初に組織された時、ヒュー・B・ブラウン副管長は私たちに対して、霊界での伝道活動は、地上における伝道活動に比べて、一層速度を増して進んでいると話をしたことがあります。ブラウン副管長は続けて、ジョセフ・F・スミス大管長の次の言葉を引用し、現世で永遠の福音を聞く機会がなかった人々はすべて、今それを聞いていと説きました。

「予言者ジョセフに啓示されたこの福音は、福音の知識なくしてこの世を去り、霊界へ行って獄にいる霊たちにすでに宣べ伝えられている。ジョセフ・スミスは彼らに福音を宣べ伝えている。ハイラム・スミスも同様である。ブリガム・ヤングも、予言者ジョセフの管理のもとにこの神権時代に生きたすべての忠実な使徒たちも同様である。」(「福音の教義」p.450)

そして、スミス大管長は1916年に次のように話してい

ます。

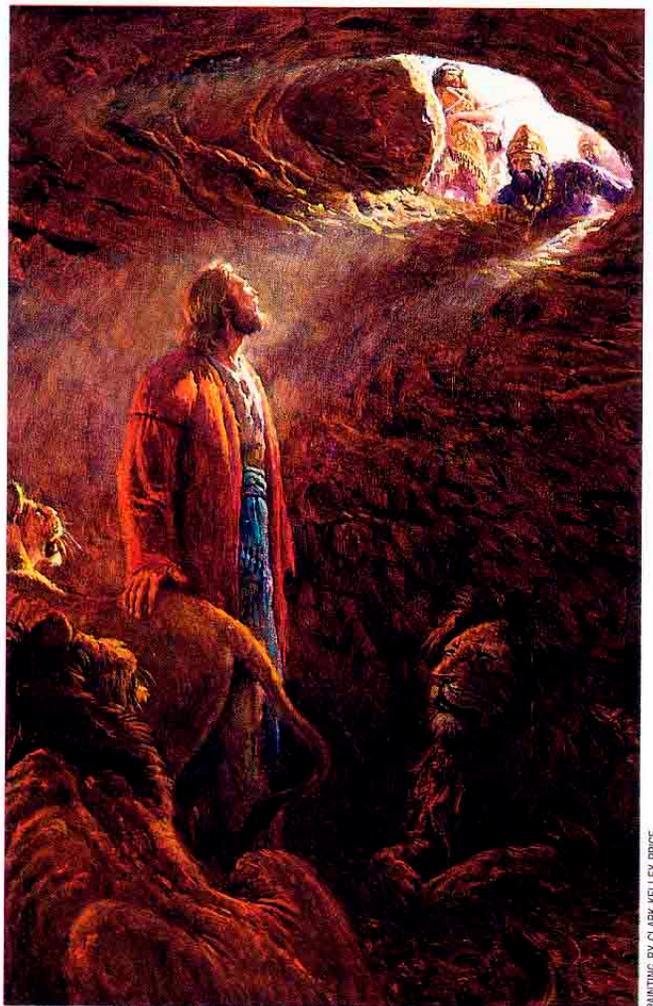
「先祖のために払う私たちの努力により、彼らの奴隷の鎖が断ち切れ、とりまく闇が一扫されて、光が彼らの上に輝き、彼らは霊界で子孫がここで行なった業について聞かされ、これらの義務を果たしたあなたと共に喜びを味わうであろう。」（「福音の教義」pp. 448—449）

私はこの義務という言葉が好きです。スミス大管長は「割り当てを果たすあなたと共に喜ぶ」あるいは「召しにこたえるあなたと共に喜ぶ」とは言いませんでした。「義務を果たしたあなたと共に」と言っているのです。

「義務を果たすあなた」という表現は、まさに自分の家族の歴史に取り組んでいる人に当てはまるものです。私はそのためにどれほどの働きや出費が求められるかを知っています。ひとりの名前を明らかにする過程で経験する数々の困難な問題についても承知しています。天父がそれらの働きをご存じであるということも心得ています。私たちは亡き先祖のために神聖な儀式を行ないますが、彼らも私たちの働きを理解しています。困難のただ中であっても、奇跡的な方法で、ひと筋の道が明らかに示されることもよくあります。

私がカナダ東部で伝道部長の任にあった時、ある地方部で系図委員会の書記として働いているすばらしい姉妹がいました。割り当てを果たす彼女の熱意は実にりっぱなものでした。当時彼女は、カナダのその地域で行なわれていた系図調査の多くの事柄について責任を受けていたのですが、自分の力では解決できそうもない非常に大きな壁に突き当たっていました。そこで彼女は天父のみもとへ行き、自分の心からの思いを打ち明け、どうか主のみ手が伸べられ、道が開かれるようにと祈りました。そして、具体的な答えが与えられるのを手をこまねいて待つのではなく、調査を続行しました。

ある日、旅の途中に、オンタリオ州ベルビルを中心街で一軒の古本屋に足を踏み入れました。彼女はその店へ入るようにと強く促すものを感じたのでした。陳列されたおびただしい数の本を見渡しているうちに、いちばん上の本棚に置かれた2冊の本に目が留まりました。そし



PAINTING BY CLARK KELLEY PRICE

ダニエルがししの穴に投げ込むと脅された時に、ししの強いあごを締め付ける口輪はありませんでした。そのことに大切な意味がなかったのでしょうか。彼は、神からの祝福を受ける前に、ししの穴の中に投げ入れられるという試練を経なければなりません。

てその2冊をどうしても見なければならぬという気持ちを覚えました。店員に頼んで、その2冊を手にして見ると、「クウィント湾岸開拓者の生活」第1巻、第2巻というものでした。彼女は1ページ、2ページ、3ページと、目を通していきました。その2冊の本には最初から最後に至るまで、すべて家族の歴史が記録されていました。そして1冊の方には、彼女がどうしても解決できないでいた問題を解く鍵があったのです。

彼女はうれしくて天にも昇る思いでしたが、「掘り出し物ですから、2冊で200ドルです」と店員に言われた時は、一転してならくの底に落とされた気分でした。しかし、地方部内のある長老定員会が、その価値を確認してから、2冊を購入しました。後に2冊の本はソルトレークシティの系図記録保管所に送られました。その中

には故ヘンリー・D・モイル副管長についての系図調査でそれまで未確認だった重要な情報がいくつか含まれていたそうです。モイル副管長の先祖の幾人かはオンタリオ州ベルビル近くのクウィント湾岸の出身だったのです。「疑わないで、信仰をもって」義務を果たしたすばらしい女性のおかげで、すばらしい祝福がもたらされたのです。

よく引用されるヤコブの手紙の言葉は、決して求道者だけに向けられたものではありません。私たちにとっても大切な意味があるのです。

「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。

ただ、疑わないで、信仰をもって願い求めなさい。疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。」
(ヤコブ1：5-6)

何か障害に直面した場合には、その問題解決のために聖霊の導きを求めなければなりません。そうするとき、みたまが与えられて、道が開かれ、鍵が授けられることを証します。

トンガ神殿が建つかなり以前、ジョン・H・グローバー長老がトンガの伝道部を管理していたころの話です。ある時グローバー長老は、ニュージーランド神殿への訪問を終えて戻って来たばかりの40人の教会員を迎えに港へ行きました。彼らは神殿に行くために、持てるすべてのものを犠牲にしていました。神殿に参入して自身のエンダウメントと結び固めの祝福を受けられるようにと、何年もの間つましい生活をしてお金をためました。彼らは戻って来た時、グローバー伝道部長が感激しながら出迎え、自分たちの旅をほめたたえてくれるものと期待していました。しかし、長老は後に私にこう話してくれました。「私はそういう心境ではありませんでした。むしろ、彼らに少々厳しいことを話さなければならないという気持ちでした。」彼らは船を降りると笑みを浮かべながら言いました。「今回私たちがしたことについてどうお思いですか、グローバー伝道部長。」

「たくさんのことをしてきましたと思いますよ。長い旅をして、多くのことを忍耐し、皆さんが代理人として儀式を受けた人々の幸福に大きな貢献をしてきました。しかしその中に、トンガ人の名前はどのくらいありましたか。皆さんの先祖は何人いましたか。」

グローバー伝道部長が上手なトンガ語で流暢に話すのを聞いているうちに、その人々は、自身のエンダウメントとひとりかふたり程度の先祖のための儀式を除けば、ニュージーランド神殿で受けた儀式は、ソルトレーク神殿あるいはローガン神殿など、どこの神殿でも受けられる類のものだったことを認めました。グローバー伝道部長は丸1時間にわたって、彼ら自身の先祖に対する責任について話しました。こうして彼らの永遠につける事柄への理解の目が開かれました。

このことがあって以来、トンガ諸島での家族歴史の探求に対する関心は高まりました。彼らはすばらしい家族歴史委員会を組織し、自分たちの無数の先祖のために儀式を行なうようになったのです。

私は単純な信仰の人間です。ジョン・グローバー伝道部長が受けた靈感は、すでに世を去っていた人々の祈りの結果として与えられたものであると証します。彼らは長い間待ち続け、ジョセフ・F・スミス大管長の言葉にあるように、自分たちを捕らわれの状態にしている鎖から解き放たれる日を待ち望んできたのです。ずっと闇の中にとどまっていたが、今は、昇栄できるように、天の光が自分たちの上に輝くのを見たいと願っているのです。

兄弟姉妹の皆さん、善をなすのにうむことがあってはなりません。自分の働きなど大した価値もないと感じるときには、人の値は神の前に貴いものであるということを思い起こしてください。私たちは道を備える機会を与えられています。これらの人々が神から与えられた機会であるすばらしい栄光に備えることができるよう、信仰をもって探求を行ない、その後儀式を受ける機会を与えられているのです。ですから、このみ業について証を受けた人が、その成長と進展のために多くを捧げたいと思うようになって何の不思議もありません。人がこの

み業を行ない、信仰の試しを経験し、すばらしい祝福に値する者とされると、朝日の前に霧が消えていくように、いつか障害が消えていきます。このことに何の不思議があるでしょうか。

信仰という鍵は、人々が望み必要としている祝福を受けるための前提であることが、聖典の至る所で証明されています。アブラハムは大切な息子イサクを進んで捧げるように、という過酷な試練を経験しました。それは、彼が次のような主のみ言葉を聞く前のことでした。「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った。」(創世22：12)アブラハムの信仰も試しを受けなければならなかったのです。

予言者ダニエルも、神からの祝福を受ける前に、ししの穴の中に投げ入れられるという試練を経なければなりませんでした。3人のヘブル人の若者も、信仰の試しとして燃え盛る炉の中に投げ込まれました。ジョセフ・スミスも、信仰の試しとして、静かな森の中に入り、ひざまずいて祈りました。

アブラハムが信仰を試されている時には、彼の目に映るやぶの中に雄羊がいなかったのは、大切なことではなかったのでしょうか。ダニエルがししの穴に投げ込むと脅された時に、ししの強いあごを締めつける口輪はありませんでした。そのことに大切な意味がなかったのでしょうか。3人のヘブル人の若者が燃える炉の中に投げ込まれた時に、耐火服を着用していなかったことに大切な意味がなかったのでしょうか。少年予言者ジョセフがひざまずいて全能の神の助けを求めた時に、父なる神と御子イエスは、彼の信仰が試されるまでみ姿を示されませんでした。そのことに大切な意味がなかったのでしょうか。

私たちに信仰という鍵が必要です。錠をかけた扉も、鍵の力には耐えることができません。信仰はこのみ業を進めるために欠かすことができないものです。その鍵は私たちの手の届く所にあります。そして、その鍵は私たちが求めてやまないものを、扉を開いて見せてくれるのです。

教義と聖約第76章には、1832年2月16日に、オハイオ州ハイラムで予言者ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンに与えられた示現が記録されています。この啓示では、忠実な人々への主の約束がなされています。

「聞け、汝ら諸々の天よ、地よ耳を傾けよ。喜べ、そこに住む者たちよ。主は神にして、主の他に救い主なければなり。主の知恵は偉大にして、その為したもうところは驚嘆すべく、その御業の終は誰も知る者なし。その企画は敗るることなく、またその御手を止め得る者絶えてなし。永遠より永遠に主は同じにして、その齡は尽くことなし。主かくの如く言う。主なるわれはわれを畏るる者に恩恵と憐みとを与え、終りまで義しく且つ真実にわれに仕うる者に誓を与うるを喜ぶ者なり。彼らの得る報いは大きく、その栄は永遠なるべし。われは彼らにすべての奥義、すなわち昔より今に至り、またこれより永き未来にわたるわが王国のあらゆるかくれたる奥義を知らしめ、わが王国に就けるすべてに関するわが旨を知らしめん。」(教義と聖約76：1-7)

私たちはこの信仰という鍵を自分のものにすることができます。皆さんがこの鍵を賢明に用い、それによって、天父の王国で与えられる機会についてのすばらしいビジョンが、先に世を去っていった人々の前に開かれるように願っています。□

話し合いのポイント

1. 福音は霊界で霊的な闇の中にいる人々にも宣べ伝えられている。
2. 私たちには先祖の名前を調べ、彼らのために福音の神聖な儀式が行なわれるようにする責任がある。
3. 先祖の名前を調べるための鍵は、主が神聖なみ業の中で導きを与えてくださるという信仰である。
4. このみ業を進めるに際して、親族間の協力は大きな力となる。
5. 障害に直面したときには、問題解決のために聖霊の助けを求めるべきである。

大きな力に 助けられて



カサンドラ・リン・ツァイ

台湾の台北市で、独身成人クラスを担当するふたりの日曜学校教師のひとりに召された時のことです。監督は私にこう約束しました。助けが必要なときにはいつでも聖霊が助けてくださるでしょう、と。この約束が後にどれほど大切になるか、その時は思いも寄りませんでした。

私は独身成人のクラスでは若い方でしたので、その責任がとても不安でした。しかし、教師がもうひとり召され

ていることは助けになりました。彼女がある週にレッスンをすると、私はその翌週教えることになっていました。私は熱心に準備をし、皆が私のレッスンをとても楽しみにしていると言ってくれました。すべては順調にしていると感じていました。

ところが、ある日曜日のことです。教室に来た私は、その日教える番だったもうひとりの教師がまだ来ていないのに気づきました。私は青くなって、



摩門經

摩門教與世界

大急ぎで彼女に電話しました。

「ごめんなさい」と眠そうな声がします。「今何時かしら。寝坊しちゃったみたい。」もうレッスンは始まっているはずの時間だというのに、彼女はまだベッドの中にいたのです。

教室に向かって廊下を歩いていると、ステーキ部長がにこやかにあいさつし、明るくこう言いました。「きょうは妻と一緒にあなたのクラスに出席しますのでよろしく。」私はあまりのショックに声も出ないまま、弱々しくうなずき、かすかにほほえみました。頭の中はレッスンのことでいっぱいです。たしかきょうのレッスンはニーファイ第3書第15章から第19章のはずです。

人でいっぱいの教室に足を踏み入れた時には、もうすでに7分遅れていました。クラス役員が開会の祈りをしてくれました。震える手でモルモン経を開きました。レッスンは、証を分かち合ってもらつつもりでいました。ほかに何も思いつかなかったからです。ところが聖典を読み始めると、私の能力を超えるある大きなを感じ、話し合いをするのに適切な聖句を選ぶことができました。私の舌は緩みました。ちょうど主がオリヴァ・カウドリにこう

約束されたように。「^{しか}而していかなる時と場所にありても、彼は口を開いて夜も昼も高鳴るラッパの響の如き声もてわが福音を宣ぶるべし。然る時は、われ人の中に知られざる程の力を彼に与えん。」(教義と聖約24:12)

その時ほど謙遜な気持ちになったことはありません。教えているのは私ではなく、聖霊なのだとわかりました。自分が主の楽器となり、主が私を通して教室を美しいハーモニーで満たしていらっしゃるかのようでした。その力に圧倒されて、体の力が抜けるように感じました。

喜びに満たされながら、クラスの人たちとともに救い主がニーファイの民に語られた力強く感動的な場面を読みました。「『^{なんじ}汝らはその信仰の故にさいわいなり。見よ、今わが喜びは満ち溢れたり』とかれらに言って、涙を流したもうた。」(IIIニーファイ17:20-21)

教室が静まり返りました。皆の目に涙があふれています。

私にとって、そこに書かれたことは、単なる言葉以上のものでした。救い主と彼を取り囲む忠実な弟子たちの姿を、心の中にはっきりと描くことができま

した。救い主が私たちのすぐそばにおいでになり、私たちが救い主に近づいているように感じました。

そしていよいよ救い主がニーファイの民のために祈る箇所に来ました。「ただその信仰の厚き故に……かれらがわれによりて清められんことと、また父がわれにいます如くわれもかれらに在りてかれらと一つになり、かれらによりてわが栄光を示さんことをねがう……。」(IIIニーファイ19:29)私はクラスの人たちに言いました。「皆さん、このことを考えてみてください。私たちが自分自身を清め、主とひとつになるなら、救い主は、私たちを通してその栄光を示してくださるのです。なんとという喜びであり、祝福でしょうか。」

そう言うと、私は泣いてしまいました。

このすばらしい経験は、監督が言った約束の成就となりました。この経験を通して私は、主が私たちを深く愛しておいでになり、もし私たちがふさわしく生活し、正しい道を示してくれる指導者の勧告に従うなら、聖霊がいつでも助けてくださることを知りました。

□

教室で聖典を読み始めると、私の舌は緩んできました。教えているのは私ではなく、聖霊なのだとわかりました。



努力が生んだ 芸術

ジャネット・トーマス

PAINTINGS BY BRAD CHIDESTER; PHOTOGRAPHY BY WELDEN ANDERSEN



スタン・チデスターの居間に入ると、壁という壁に絵が掛かっているのに気づきます。印象派的な水彩画、力強い抽象画、複雑なモンタージュの作品(図版、挿絵またはその一部を切り抜き、組み合わせてはりつけたもの)もあります。スタンがこのような美しい芸術作品の大ファンなのだろうと思うかもしれませんが、実は、スタンの弟で、車いすに乗って部屋を動き回っているとてもやせた青年のブラッドが、これらの作品を描いた芸術家なのです。

ユタ州サンディのブラッド・チデスターは、筋ジストロフィーのため、これまでの人生の大半を車いすで過ごしてきました。子供のころ、ユタ州の筋ジストロフィー患者基金のポスターに載ったこともありました。

幼い時から芸術的な才能を表わしたブラッドは、多くの子供たちと同様にトラックが大好きでした。いつもいたずら書きをしていましたが、車輪のついた乗り物を描くのが特に好きでした。

ブラッドは絵を描くことが好きだったので、それがほかの人を元気づける方法となったり、楽しい友達を作るのに役立ったりしました。11歳の時、テレビで自動車レースを見ていました。すると、車が衝突し、ピットで燃え上がるのを見て肝をつぶしました。その時

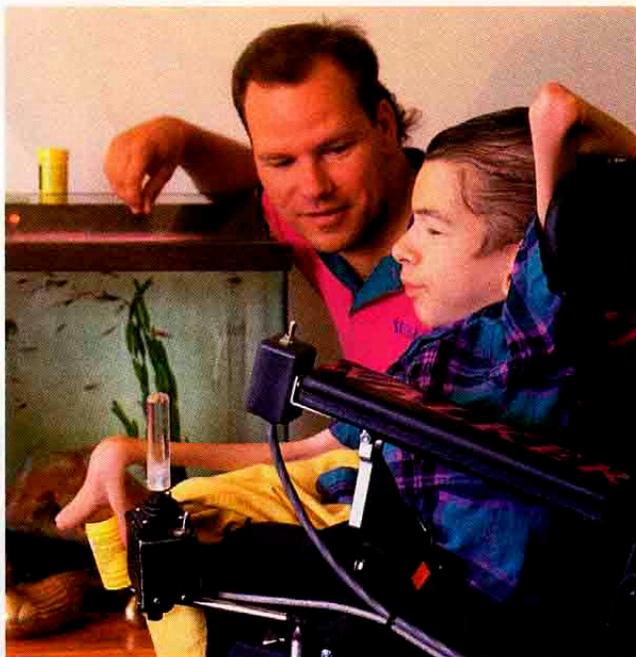
重傷を負ったひとりが、レースチームのマネージャーであったデリック・ウォーカー氏でした。

ブラッドはこのように語っています。「ぼくは、レースカーの絵を描いて、それをお見舞状として入院中の彼に送りました。その後、彼はお礼の手紙をくれました。それ以来、ぼくたちは友達になったんです。」そのようなちょっとしたやり取りから友情が花開きました。それから、ウォーカー氏ともうひとりのレース仲間であるロジャー・ペンスク氏は、毎年ブラッドを飛行機に乗せ、主要なレースの観客として招きました。



ブラッドが高校生の時、美術の先生が水彩画の手ほどきをしてくれました。それは彼の好きな技法となりました。ブラッドはこのように述べています。「ぼくは、水彩画が好きで、ずっとそれをやってきました。すると、秘書をしているある人が、ぼくの風景画を1枚買ってくれました。それにはほんとうに感激しました。多少でもお金を稼ぐことができる、とわかったのですから。」

ブラッドは、視覚芸術分野でユタ州のスターリング奨学金(優秀な成績を収めた高校生に贈られる)受給者に指名されました。その後、コミュニティーカレッジでグラフィックアートのクラスを受講し、彼の作品がギャラリ



ーに展示してもらえるようになりました。芸術家としてはまだ悪戦苦闘中のブラッドですが、その作品はだんだんと売れるようになってきました。

ブラッドが興味を持つアイデアや物事を記録しておくために、ブラッドと家族はどこに行くときもカメラを持って出かけました。そして、彼の芸術的な目が捕らえるものは何でも写真に撮ってもらいました。また、彼は自分の技法をだんだんと広げていきました。長い間彼は、写実的な絵を描いてきましたが、ここ数年、新しい手法に挑戦しています。「ぼくは、抽象画はだれにでも描けるといつも思っていました。やってみると、どんなにむずかしいかわかります。今では、抽象画は、ぼくの好き

な手法のひとつです」とブラッドは語っています。

ブラッドは、3人の兄と父親に支えられて生活しています。彼の母親は、数年前に亡くなりました。彼は、家族が自分のためにしてくれることすべてに感謝していますが、今の生活で変えたいことをひとつ挙げるとすれば、と聞かれると、「もっと自立したいです」と答えます。そのような姿勢で、神殿に行く準備もしています。

ブラッドは、才能ある芸術家ですが、自分の作品を拒絶された経験が何度もあります。「ギャラリーからぼくの作品の展示を断わる手紙をたくさん受け取ってきました。でも、そんなことにくよくよしてはいられません。前進し続けなければならないのです」とブラッドは言います。

彼は前進を続けるだけでなく、ほかの人と成功を分かち合っています。筋ジストロフィー協会がオークションに出せるよう、毎年、協会に絵を寄付しているのです。オークションで得たお金は筋ジストロフィーとの闘いのために使われます。

確かにブラッドは、神から与えられた才能を開花させる秘訣^{ひけつ}を心得ているようです。「もし夢中になっていることがあるなら、とことん追求すべきです」と彼は言っています。努力しようとしないうまくいくだけでも挙げられる肉体的ハンディキャップを持つ若者でありながら、彼は自分自身のこの言葉どおりに生きてきました。ブラッドこそ、真の芸術家と言えましょう。

援助に関するブラッドの言葉

ブラッドは高校時代を回想し、周りの人が取った態度でうれしかったことと傷ついたことをこう言っています。彼の提言は、皆さんが今度障害を持った人に出会ったとき、役立つことでしょう。

1. 「中には、ぼくの気持ちを傷つけるかもしれないと恐れているような子もいました。それで、なんとなくぼくを避けたのです。でも、ぼくのことを知ろうとしてくれる方が、うれしかったです。」

2. 「ぼくを気の毒に思い、必要以上にやさしくしようとする人もいます。でも、普通の人と同じように扱われる方がいいのです。怖がらないでほしいのですが、同時に行きすぎたこともしないでほしいのです。」

3. 「子供たちがぼくに質問しようとする時、親がその子を黙らせるのも、困ります。小さな子供たちは、すばらしい存在なのですから。」

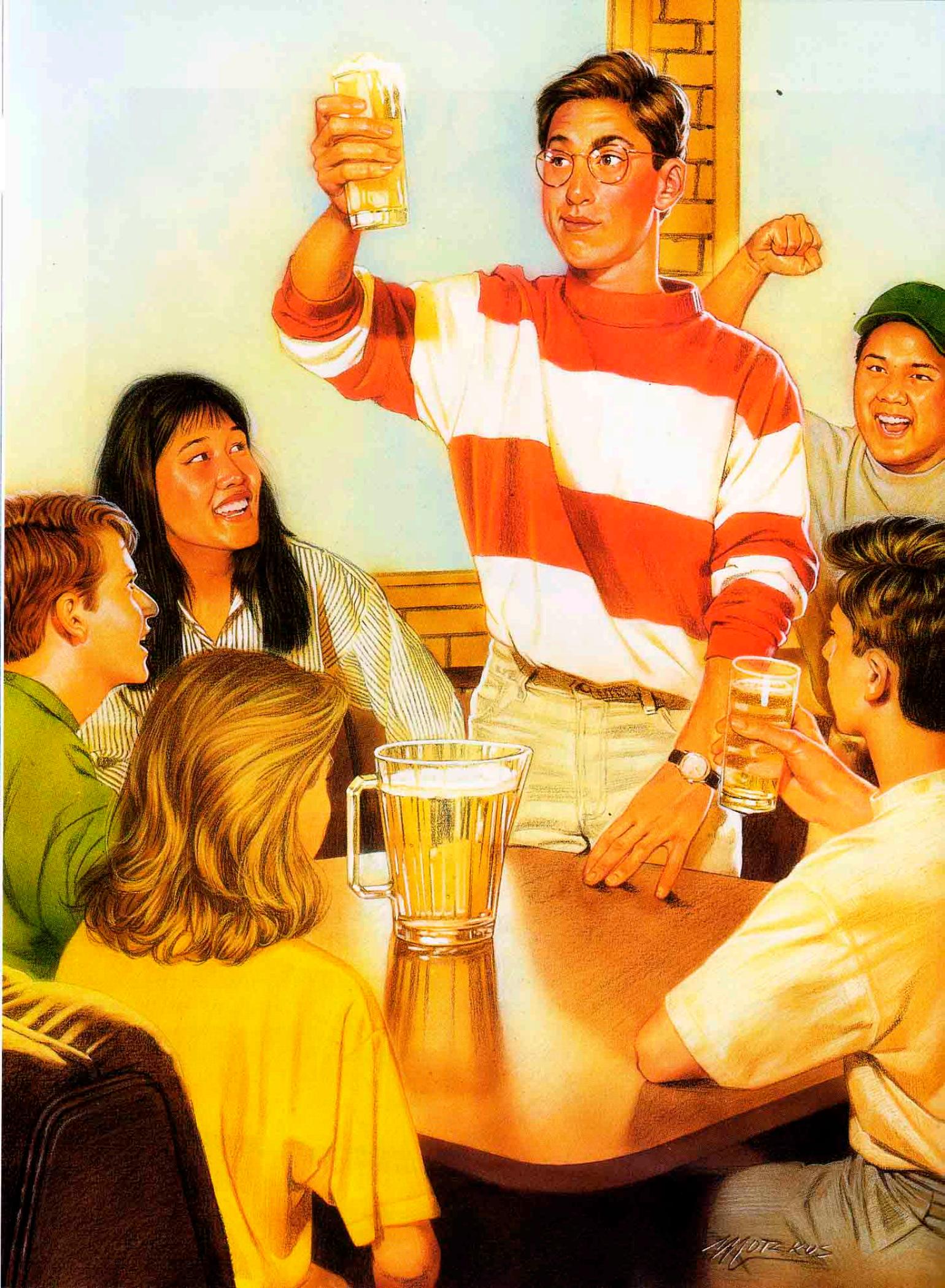


4. 「人から話しかけられるのは好きです。それは、障害を持つ人に対して、どのような行動を取ったらいいかを学ぶ最良の方法です。何でも尋ねてみてください。」

□

ブラッド・チデスターは、神から与えられた才能を開花させる秘訣^{ひけつ}を心得ており、彼の作品を買い求める人は増えてきている。彼はまた、筋ジストロフィー協会に絵を寄贈することによって、成功を人と分かち合っている。左ページ——ブラッドと兄のスタン





MOTZ-KUS

「ぼくがモルモンだって わかってるだろ」

フィル・レシュケ

恒例行事とでも言いましょうか。あのころ私たち仲間間は、フットボールの試合が終わると、勝っても負けても、私の緑色のおんぼろ車にみんなで乗り込み、行きつけのピザレストランに向かったものです。その店はいつもこんでいて、勝ったときはなおさらでした。その夜は、ライバル校のチームを破った後だけに、だれも彼もが集まっていました。

フットボールチームが到着するまでに、店は学校の生徒たちでごった返していました。私はなんとか店の隅に席を見つけると、兄のデーブを探し始めました。

デーブはいつもこのようなパーティーの中心人物のようでした。穏やかで人当たりのいい性格なので、皆がデーブと一緒にいたいと思うのでした。コロラド州に住んで間もないのに、デーブは高校の生徒会長に選ばれたくらいです。

私の方は、高校でデーブほどの人気はありませんでした。しかしデーブはよく、仲間たちとの活動に私を連れて行ってくれました。私がデーブよりも体が大きくなってからは特にそうでした。私は「デーブの大きな弟」と呼ばれるようになり、そのことを誇らしく思うようになりました。店が超満員になった時、店の中央近くにあるテーブルにやっとデーブを見つけ出しました。すると突然、だれかが叫びました。「なあ、みんな。きょうはデーブの18歳の誕生日だ。もうりっぱな大人だぞ。」

「そうだ。もうデーブは法律的にも大人だ」とだれかが付け加えました。当時、コロラド州の法律では、18歳になれば合法的にビールを買って飲めたのです。学校の一握りのモルモンにとって、18歳になることは毎年の誕生日のひとつにすぎませんでしたが、級友の大半にとって「法的に」大人になることは大きな出来事だったのです。

皆が徐々にデーブのテーブルの周りに集まり始めました。間もなく全員が「ハッピー・バースデー・トゥー・ユー」の大合唱をし始めました。

「デーブ、目をつぶれよ」とだれかが大声で言いました。生徒たちの間に道ができ、そこへ泡立つ黄金色のビ

ールをなみなみと注いだ巨大なグラスが運ばれてきました。そしてデーブの手に差し出されたのです。店じゅうに割れんばかりの大歓声が起こりました。私はどうするつもりだろうと思いながら、店の隅からデーブを見守りました。いつも私の模範であり、信仰深い兄でした。もちろんデーブはこれまでこのような状況に直面したことはありませんでした。デーブは自分を取り巻く店じゅうの仲間たちを見回していました。デーブには、私が後ろの隅から見ているのはわからなかったと思います。

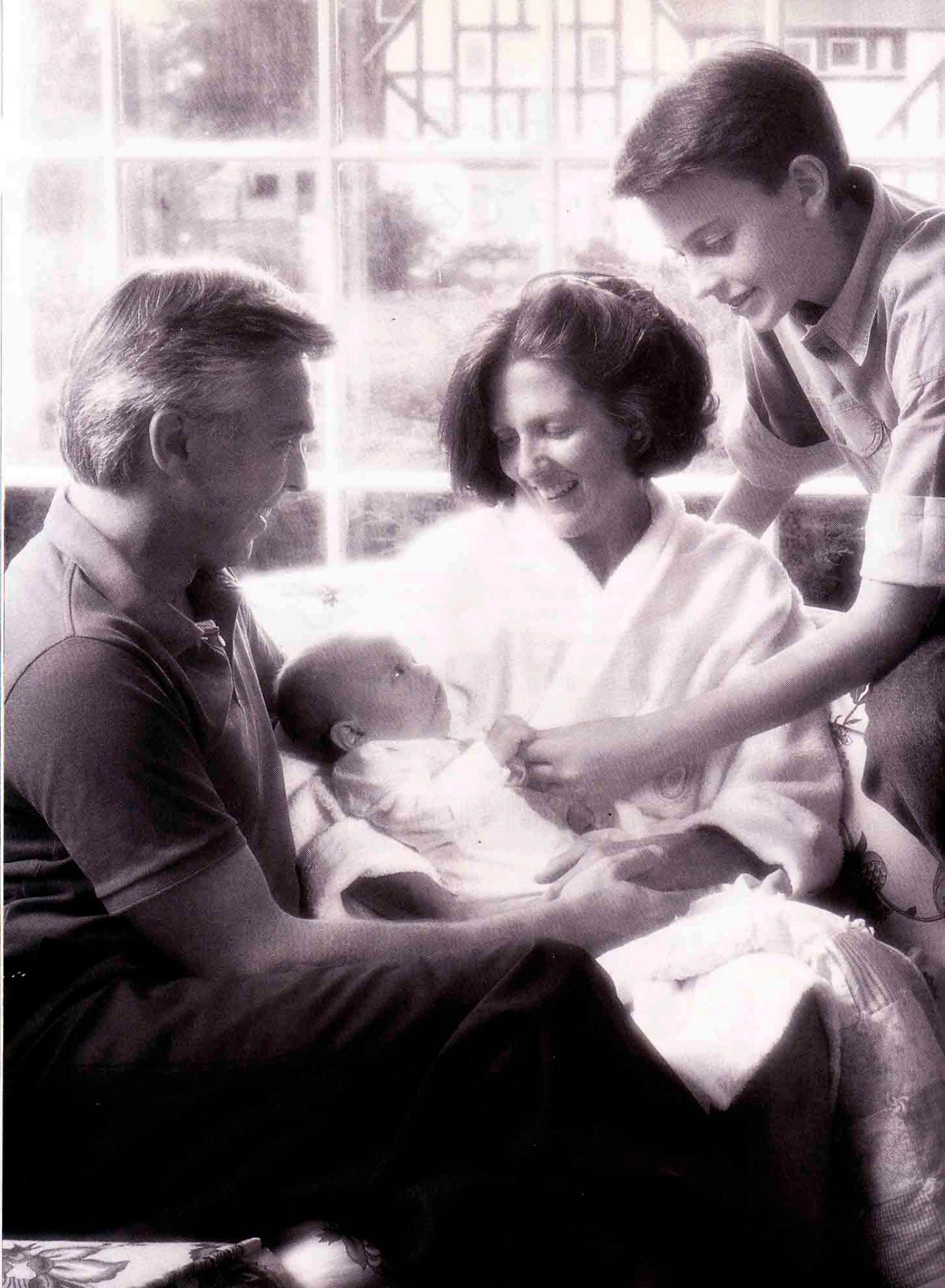
とても長い時間が過ぎたように思えてから、ついにデーブは立ち上がりました。それからビールのグラスを取り、ゆっくりと空中高く上げました。心配で私の胸はどきどきしていました。きっとデーブも同じだろうと思いました。静かに、というだれかの声で辺りは静まり返りました。

「ぼくの誕生日に、みんながぼくのことを気にかけてくれてほんとうにありがとう」とデーブは高く上げたグラスを見詰めながら言いました。「でもみんな、このやり方はまずいよ。ぼくがモルモンだってわかってるだろ。とにかく、ありがとう。」デーブが持ち上げたグラスを下ろして座った時、生徒たちの中にざわめきが起こりました。モルモンは楽しむことを知らないというつぶやきも聞こえてきました。

その後、私はデーブと一緒にになり、すがすがしい秋風の中を車へと向かいました。私はこう言いました。「デーブ兄さん。兄さんがプレッシャーに負けてばかなことをするんじゃないかとちょっと心配したよ。」

するとデーブは肩をすくめて言いました。「大したプレッシャーはなかったよ。だって、今夜、何かを決心する必要なんてなかったからね。ぼくが知恵の言葉を守ろうと決心したのは、もう何年も前のことなんだ。前もって決意しておけば、いざという時でもどうってことないさ。」

私はほほえみしました。デーブの大きな弟であることをさらに誇らしく思いながら、家に向かって車を走らせたのでした。□



性的に清い生活を 送れるよう 若人を助ける

ジョイ・サンダース・ランドバーグ

私 たちを取り巻く環境について考えると、道徳的な清さについて子供たちに教えることを、かなり優先させなければならないことがはっきりとわかります。昔は、私たちは社会から助けを得ようと思えばできました。しかし、今では、そんな期待はできません。実際、概して社会はすでにサタンの側に立ち、不道徳を好ましい生き方として受け止めつつあるようです。

しかしながら、一部のマスコミがそうした傾向を時代の流れだと納得させようとしても、私たちの社会には、今なお健全な倫理観を守ろうとする強固な基盤があります。おおぜいの親たちが、私たちを取り巻く悪影響に対抗して、敢然と立ち上がろうとしています。当然、私たち教会員も、こうした不道徳な風潮に反対するとともに、周囲の人々にも反対するよう教える責任があると感じています。

ここ何年か、私は数多くの親や監督、そして青少年たちと、性道徳について話し合ってきました。その結果、性的に清い子供たちを育てた親たちには、ある共通点があるのに気づきました。それは、以下のような5つの指針にまとめることができます。

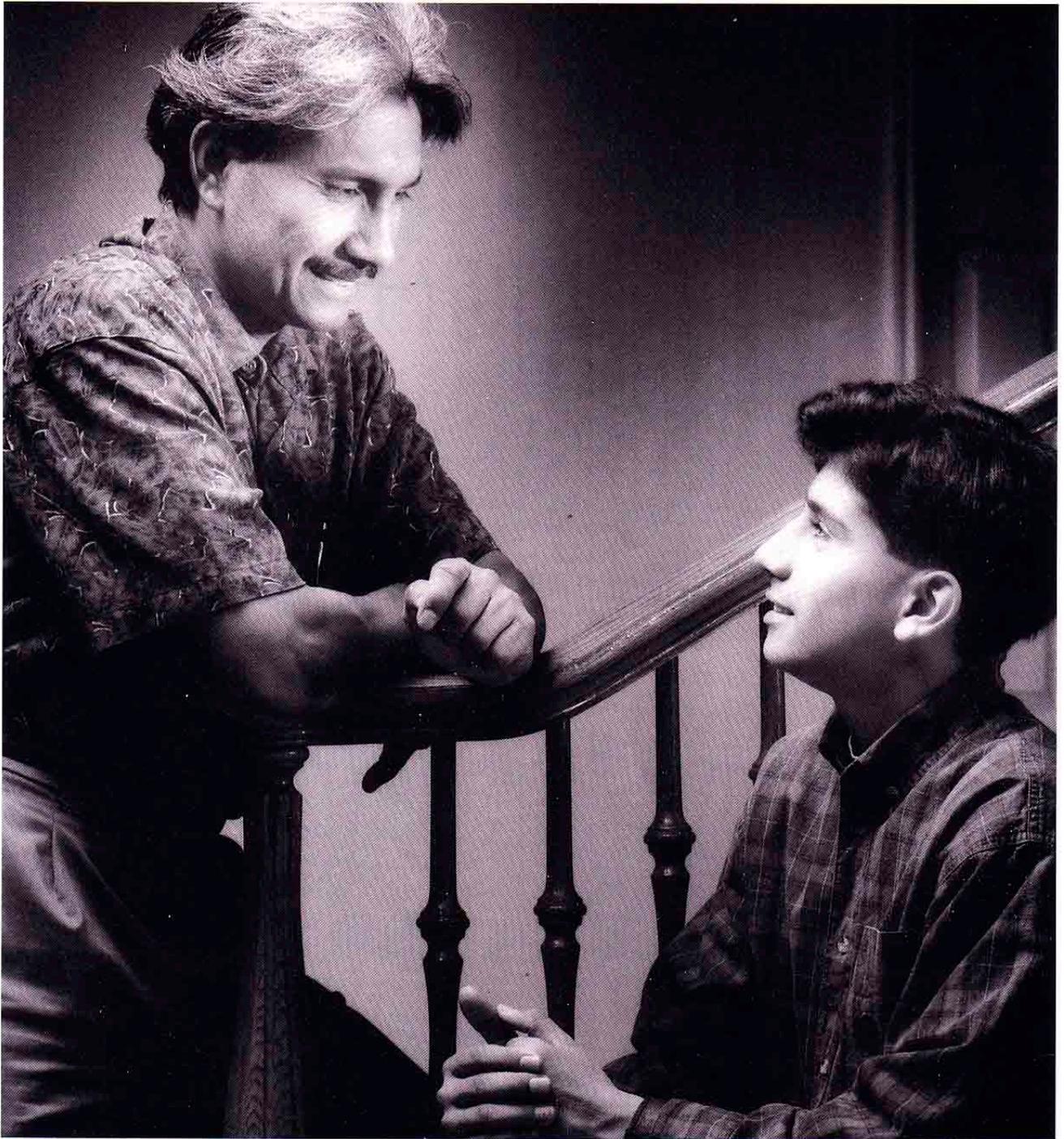
自分たちの肉体が、愛にあふれた天の御父の創造による神聖なものであること、そして、創造の力を守り、決して汚さないようにすることが自分たちの神聖な責務であることを、子供たちに教えておかなければならない。

心を開き、愛情をもって教える

私たちは、自分の息子や娘に性について教える最初の人物となる必要があります。それは、最初の情報がいちばん大きな影響を及ぼすからです。慎重に、祈りの心をもって、まず、基本的な肉体の性機能をどう教えるか、計画を立てる必要があります。

また、そうした指導が1回限りであってはならないことも、認識しておかなければなりません。初めて教えた後で、「やれやれ、これで終わった」などと考えるはいけません。子供たちが成長するにつれて、必要な情報も増大していくからです。親は、子供たちの質問に、おじ惑うことなく、霊的な導きを受けて答えられるよう、子供たちの身近にいる必要があります。子供たちには、自分たちの肉体が、愛にあふれた天の御父の創造による神聖なものであること、そして、創造の力を守り、決して汚さないようにすることが自分たちの神聖な責務であることを、教えておかなければならないのです。

道徳的に清い生活を送っているある青年が、私の元へ来てこう言いました。「私の両親は、私がまだ幼い少年のころから、性について私に教え始めました。」生物学的な説明にとどまらず、この両親は結婚生活における適切な性の役割についても教えました。「ですから私は、どんなことでも両親に尋ねられるという気持ちを抱いていました。実際、答えを求めて何度も両親の元に行ったものです。」



普通、子供にとって、こうした奥の深い問題について、自分から話を切り出すのは、なかなか容易なことではありません。親の方で、子供たちが質問できる雰囲気を作ると助けになるでしょう。一対一でだれにもじゃまされずに話し合うには、一緒に釣りに出かけるのがいちばんいいと考えて実践した父親もいます。子供たちを気遣うある母親は、時折、10代の娘たちひとりずつと昼食を取ることで、話をする機会を持ちました。しかし、話し合う機会は、たいてい、家族と一緒に家事をしているとき

とか、ごく普通の活動を一緒にしているときなどにも、自然に生じるものです。

親たちの中には、こうしたことを正面切って教えることに戸惑いを覚え、結局何も教えていない人がいるかもしれません。現代の世界では、それが悲劇を招くのです。性について子供たちに教えるときに、何か参考になる資料が必要なら、教会で出版している「良い親になるために」(31125 300)という冊子を読み直してみるとよいでしょう。

普通、子供にとって、奥の深い問題について、自分から話を切り出すのは、なかなか容易なことではない。親の方で、子供たちが質問できる雰囲気を作ると助けになる。

性道徳に関する教会の教義を教える

教会の指導者たちは、性的な清さに関して主がどのように望んでおられるのか、明確に定義しています。「若人のために」(34285 300)というパンフレットの中には、次のように述べられています。「主はある種の行ないをはっきりと禁じておられます。その中には、結婚前におけるあらゆる形の性的関係、ベッティング、性倒錯(同性愛、強姦、近親相姦など)、マスターベーション、また自制心を忘れたわいせつな思い、言動、行動などが含まれます。」(p. 16) 子供たちに、こうした言葉の意味を福音の教えにそって理解させる必要があります。もし私たちがしなければ、だれかほかの人が、みたまを受けずに、異なったニュアンスで私たちの子供に教えることになるでしょう。

私たちは、10代の子供たちが、エズラ・タフト・ベンソン大管長の次の言葉の意味を理解できるようにする必要があります。「罪とされる事柄の中で、殺人と聖霊を否定することを除けば、不義な性関係ほど重大なものはほかにありません。不義な性関係とは、未婚の人がかかわった場合には、私通のことであり、既婚者がかかわった場合には、姦淫というもっと重い罪のことを指しています。……神の目から見て、貞節という言葉が時代遅れになることは決してありません。」また別の機会に、予言者は次のように言っています。「私たちの道徳的な価値観が誤って伝えられているために、青少年の中には、たばこには恐れて手を出さずにいながら、ベッティングにはためらいもなくふけている者がいます。両方とも間違っていますが、後者の方が前者に比べたら、はるかに重大です。」(「エズラ・タフト・ベンソンの教え」pp. 279, 281)

もし適切に教えられてさえいたら、次のような事態は起こらずに済んだのです。これは、ある青年が私に教えてくれた話です。この青年と同じ所で働いているある若い末日聖徒の女性が、自分は伝道に出ることを計画しているボーイフレンドと、ときどき不道徳な行ないをしている、と打ち明けたというのです。青年はこの女性に、そんなことをしていたらボーイフレンドは伝道に出る資格を失うことになる、と告げました。ところが、この女性は、こう答えたというのです。「だいじょうぶ、伝道に出られるわ。だって、私たちちゃんと悔い改めるから。」

私たちは、子供たちに、「[いかなる形であれ] 性的な罪を犯しながら、計算ずくの告白や [その場しのぎの]

話し合う機会は、たいてい、家族と一緒に家事をしているときとか、ごく普通の活動を一緒にしているときなどに、自然に生じるものである。

悔い改めをすることは主の目にかないません」という言葉の意味をはっきりと理解させる必要があります。(エズラ・タフト・ベンソン『教会の若い女性の皆さんに』「聖徒の道」1987年1月号, p. 91) 宣教師として伝道に出ることに関して言えば、重大な性的な罪があった場合、伝道に出るのは最低でも1年から3年は遅れることになります。

私たちは悔い改めについて教える必要がありますが、教える際には誠実に教える必要があります。ベンソン大管長は次のように言っています。「何か重大な罪を犯した場合でも、望みがないなどは決して考えないでください。悔い改めも赦しも福音の一部だからです。私はこのことを神に感謝しています。しかし、その悔い改めは真の悔い改めでなければなりません。真の悔い改めとは、罪を犯したことを心の底から深く悲しむことであり、生活に改革をもたらすものです。単に罪を告白することだけではないのです。」(「我らが忠誠を尽くす3つのもの——神と家族と国家」p. 196)

賢明な選択の方法を教える

子供たちは、性的な感情が自然なものであり、神から与えられたものであること、そして、そうした感情の表出をコントロールする力も授かっていることを、理解する必要があります。私たちは、自由意志という偉大な賜^{たまもの}を授かっている祝福について子供たちがよく理解できるよう、助ける必要があります。「それであるから、あなたたちは喜び勇め。そして、あなたたちは自分の思う通りに行く自由があるから、限らない死の道を選ぶかまたは永遠の生命の道を選ぶかは、各自の自由であることをおぼえておけ。」(II ニューファイ 10:23)

一体、どのような人が永遠の生命への道ではなく、限らない死の道を選ぶのでしょうか。おそらく、選ぶということにあまり経験のない人たちだけでしょう。テキサス州のある監督が次のように言っていました。「自分でほんのささやかな決定を下すことすら子供たちに許そうとしない親が、おおぜいいます。もし、自分で自分の服や髪型、趣味などを選ぶのが許されていないとしたら、その子供たちは、永遠の行く末にかかわる事柄をどうやって選んでいくのでしょうか。」親たちは、何を置いても、子供たちが自分で選択できるよう、導いてやる必要があります。子供たちは、自分で選んだことが自分の道徳観にどのような影響を及ぼすのかよく考えるよう、親

愛の言葉を口に出し、また愛を行動で示すことによって、家庭は居心地のよい場所となる。両親が互いに愛を示し合えば、子供たちも結婚や家庭生活の有意義な面につい

から愛情深く教えられるなら、だんだんと適切な友人や音楽、映画、そのほかの活動を選ぶことができるようになるものです。

1991年4月の総大会の席上、十二使徒定員会のリチャード・G・スコット長老は、賢明な選択をするための指針をいくつか挙げて説教しましたが、その中でも最も大切なことは、「救い主とその教え、そして主の教会を生活の中心とする。決断を下すときはいつでも、この標準に添っているかどうか考える」ことであると語りました。（『人生の正しい決断』「聖徒の道」1991年7月号、p.35）

ある父親が、どうやってそのようになりっぱなし子供たちを育てたのか尋ねられたことがあります。彼はこう答えました。「子供たちが何か間違った決断を下したとしても、私はそれを恥ずべき愚かな行為とは見なさないようにしました。むしろ、教える好機と考えたのです。」たとえば、このような質問を子供にしました。「今、どんな気持ちかな。そういう行動を取ったら、どんな結果になるだろうね。」この父親は、子供に代わって自分で問題を解決してあげたいという気持ちを抑え、むしろ、子供たちが自尊心と自信を培っていく間、親として子供たちを辛抱強く見守り続けたのです。

私たちは、小言のひとつも言いたいという誘惑を退け、むしろ物語や実話、たとえ話を活用しながら、子供たちがさまざまな状況の中で自分で考え、賢明な選択をしていけるよう、手助けをしていくことができます。たとえば、ベンソン大管長は次のように言っています。「自分の命を守るように、徳を大切に守ってください。」（『教会の若い女性の皆さんに』「聖徒の道」1987年1月号、p.91）この言葉の重さを青少年に理解させるために、私は次のようなたとえ話をしています。あなたが暗い夜道をひとりで歩いているとしましょう。その時、だれかが後ろからつけてくる気配がします。振り向いて見ると、見たこともない男がナイフを振り上げて立っています。あなたならどうしますか。ここまで言うと、青少年たちは、決まって「全力で逃げますよ」と答えます。その答えに、私はこう尋ねます。『「2、3回刺されても命に別状はないさ」と考えて、その辺りでぶらついたりはしないということですか。」青少年たちはとっぴな考え方に大笑いします。この時点で私は、予言者の「自分の命を守るように、徳を大切に守ってください」という言葉を繰り返すわけです。

この教え方の特徴は、相手を固くさせないようなある場面を設定して「あなたならどうする」形式の質問をす

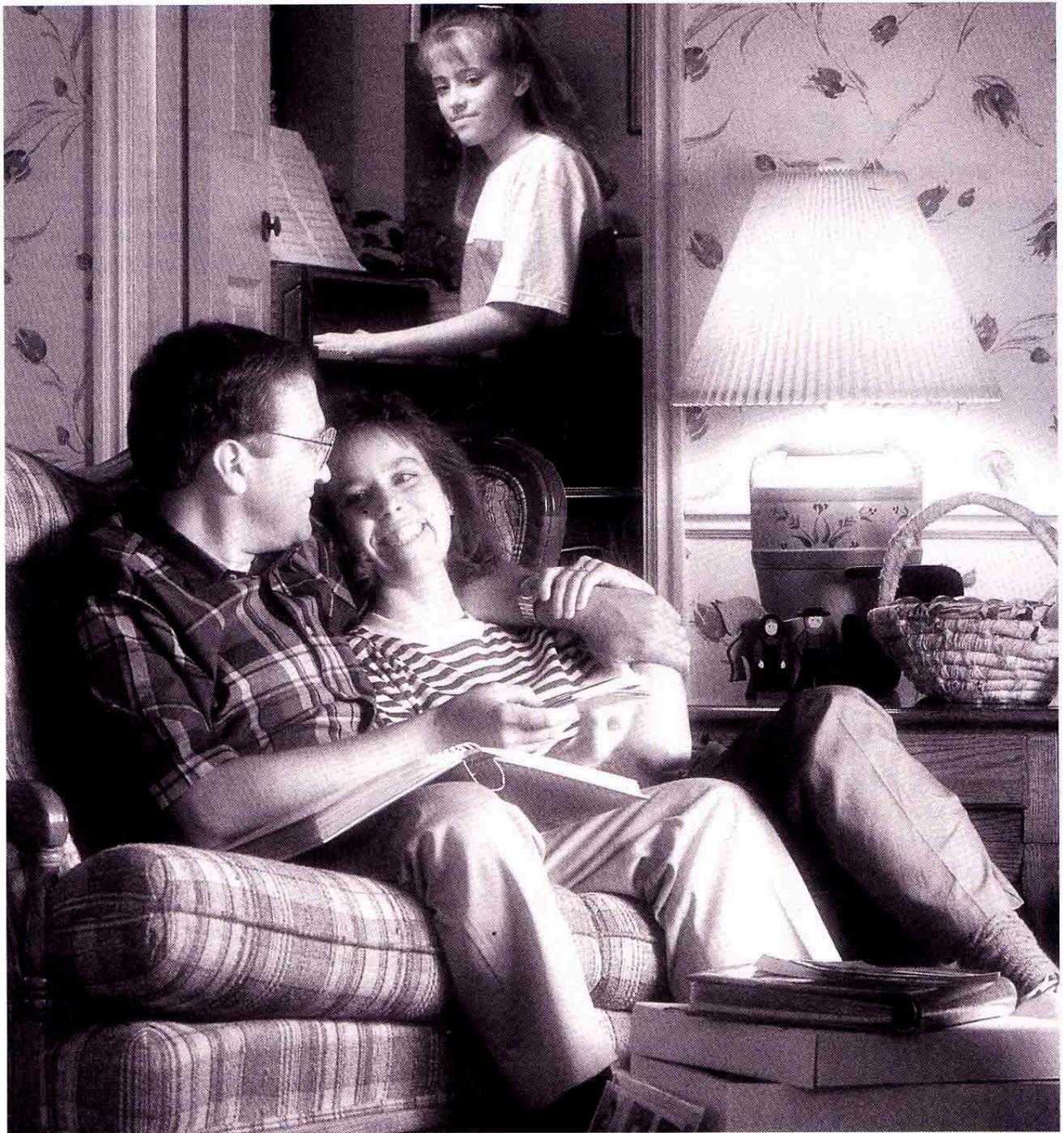
て学ぶことができるし、道徳的に清い生活を送ることの祝福についても学ぶことができる。

ることにあります。家族でこの方法を活用しているある父親は、この方法が非常に有効であると言っています。たとえば、家族のだれかが、「自分の友達がもっと肉体的に親しくなりたいと言いだしたら、あなたならどうする」と尋ねます。それに対してほかの人たちが、さまざまな状況に自分ならどう対処するか、いろいろと意見を出し合うのです。こうしてあらかじめ決めておけば、いざ正しい決断を求められる状況になったとき、大きな強みとなります。

私の夫のゲーリーは、結婚と家族問題専門のカウンセラーをしています。親子のコミュニケーションについて、実に貴重なアドバイスをしてくれます。夫はよく、子供を持つ人々に、「ごく簡単な質問をし、それから耳を傾けてやれば、子供たちは自分で考えるようになります」と言っています。私は夫が家庭でもそれを実践しているのを見てきていますし、私自身も実際に試しながらそのコツを少しずつ身につけているところです。

一例をご紹介します。ある日、我が家の息子が学校から随分がっかりした様子で帰って来ました。私が「どうしたの、そんな悲しそうな顔をして」と言うと、息子は「ジム(仮名)はばかだよ」と言うのです。「まあ、どういうこと？」と尋ねると、その後、息子からは驚くような答えが返ってきました。「ジムのやつ、お母さんが働きに出てからは、毎日放課後ガールフレンドを自分のうちに呼んでるんだ。」ここで、性道徳について重々しい説教を始めようという誘惑と戦いながら、私は「ふーん」とだけ言いました。すると息子の方で話を続けます。「ほんとうに愚かだよ。あれじゃ、自分の方から問題を呼び込んでいるようなものだよ。」その言葉は、ほぼ私が言おうとしていたことと同じでした。ただ、短かっただけです。私は「それ、どういうこと」と尋ねてみました。すると息子は、一軒の家にガールフレンドとふたりきりでいることがどれほど危険なことかについて、知っている限りのことを次から次へと話したのです。しかも、それで終わりではありませんでした。話題はこの問題のあらゆる面に及び、性病や妊娠中絶といった悪影響にまで及んだのです。私がしたことといえば、ただ耳を傾けてうなずいているだけでした。もし私がこの問題に関して説教をしたとしたら、きっと息子はほとんど耳を貸してくれなかったでしょう。

また、ある母親は、子供たちに選択について考えさせる別の方法を、次のように提案しています。「自分で関心のあるテーマのニュースや新聞記事を取り上げて話を



すると、子供たちもその警告をわりあい気軽に受け入れてくれることに気づきました。夫と私がそれらの記事について話していると、子供たちはじっとその内容に耳を傾けています。そんなとき、子供たちは、私が説教をしているなどとは思いません。その母親が、子供たちを親の会話の中に引き込むのに、特別な努力は必要ありませんでした。ただ「10代の子供たちの、自分の意見も言ってみようという衝動、特に自分の意見は求められていないという気持ちになったときに感じる強い

衝動に、期待した」だけだったのです。(レイ・ガレンディ『なぜ子供は耳を傾けるのか』「リーダーズ・ダイジェスト」1991年1月号, p. 120)新聞に報道されている記事なら、たとえそれが人生相談の記事であっても、結果の真実性については疑う余地がありません。結果についてあらかじめ知り、理解しておけば、子供たちが賢明な選択をする助けとなるでしょう。

福音に対する強い証あかしが持てるよう助ける

若人が性的に清い生き方を選ぶに当たってのいちばん重要な要素は、イエス・キリストに対する証です。そのことを、私はこれまで彼ら自身の口から、折に触れて聞いてきました。私がある若い女性に、どうやってそのような証を得たのか尋ねた時、このような答えが返ってきました。「両親にとって教会がいかに大切か、それを見ながら育ってきました。父と母は、自分たちの霊的な経験について話すとき、涙を流しながら証を伝えてくれたことが何度もありました。」

伝道に出る準備をしていたある若い男性は、幼いころから両親が聖典、とりわけモルモン経に寄せる深い愛を感じながら成長してきた、と話してくれました。「ぼくの家族はいつも一緒に聖典を勉強しました。父と母から救い主について教わりましたし、ふたりが救い主を深く愛していることもわかりました。ぼくもだんだんと自分で勉強したり、祈ったりするようになりました。父と母が生活の中で見いだしている喜びを、ぼくも自分の生活の中で味わいたいと思うようになったんです。」そして、この青年は最後に次のような印象深い言葉を添えたのです。「救い主について自分の証が強まるにつれて、救い主をがっかりさせるようなことはできないと思ったのです。」

ある若い女性も、私に次のように教えてくれました。「私は自分が誘惑に負けないように、いつも祈っています。天のお父様をとっても身近に感じるんです。天のお父様にならどんなことでもお話しできるし、いつだって助けを受けられるんです。」私は、どうやってそのような証を得たのか、尋ねてみました。その答えはこうでした。「私は両親の姿を見て、祈りには力があることを学びながら大きくなりました。」

私たちは、子供たちが強い証を得られるよう、あらゆる機会を提供していかなければなりません。そのためには、私たち自身の証も日々養い育て、子供たちに伝えていく必要があります。親が信仰と決意を持って人生のさまざまな問題に対処しようとしている姿ほど、子供たちの証を強めるものではありません。

家庭を楽しい雰囲気にする

家庭生活は楽しくなければなりません。10代の子供を持つある父親はこう言っています。「子供たちと楽しい時間を過ごすことが、性的に清い生き方を選ばせるため

の鍵でした。妻と私は、よいことは楽しいはずだ、といつも強調して言っています。」そして、このふたりはそれを実際の生活で示そうと努力しています。「楽しい時間を過ごそうと思って頑張っています。実際、成果も上がっていますよ。」

私たちは、子供たちが何か間違いを犯したからといって、まるでそれがこの世の終わりであるかのような印象を与えないよう、注意する必要があります。ある父親がこう言っています。「私の10代の息子が愚かな間違いを犯して、ある事故を引き起こしてしまいました。危うく命を落としそうになったのです。その時、私は決して怒らず、ただ息子を抱き締めて、愛していることを告げました。息子は、その事故から学ばなければならないことをすべて学んでいました。ですから、私はそれ以上言葉に出す必要はなかったのです。」

愛の言葉を口に出し、また愛を行動で示すことによって、家庭は居心地のよい場所となります。私は、父と母の両方からいつも抱き締められ、絶えず褒められながら育てられたことを、よく覚えています。父は数年前に亡くなりましたが、私が10代のころ、父が私を抱き締めながら、「そのドレスはとてもよく似合うよ」と言ってくれた時の、うれしい気持ちが今でも忘れられません。

いろいろな問題があったとしても、人生の明るい面に目を向けていれば、道徳にかなった生活を送ろうという力もわいてきます。私は、ひとりで子供を育てているある友人からほんとうにたくさんのことを学びました。彼女はその信仰と、はつらつとした表情によって、子供たちに計り知れないほどの祝福をもたらしてきたのです。彼女はこう言っていました。「子供たちは皆よい子に育っているわ。」

ウィスコンシン州のある監督は、次のように語っています。「たいてい、うまくいっている家庭には、家族全員を結びつけている糸のようなものが存在し、両親はいつも子供たちの身近にいます。親は、今家族に起きていることについて知っているだけでなく、自分もその中に入って行動しているのです。また、どうしたら楽しめるか、よく知っています。家族に常に心を向けているわけです。」

祈りと戒めを守ろうとする自分たちの熱心さに応じて、私たちはみたまによる導きを受けて、子供たちが道徳的に清い生活を送れるよう助けることができます。天父は、私たち親とともにいてくださいます。子供たちは皆、神の子供だからです。□

バプテスマの祝福に一層深く感謝する

8歳のマーガレット・マクニール・バラード姉妹は、1854年のある春の早朝、バプテスマを受けるために、冷たい海に入りました。何年もたった後、彼女は自分のバプテスマについてこのように書いています。「水から上がると、ちょうど夜が明け、太陽の光が東の丘の上にゆっくりとさし始めました。それは決して忘れることのできない、とても美しい光景でした。あの時、天国にいるような清らかな思いに満たされて以来、みたまはずっと私とともにいてくださいました。」(「エンサイン」1989年7月号, p.16)

あなたの生涯を明るく照らし、慰めと励ましを与えてくれるバプテスマの力とは何でしょうか。その答えは聖典の中にあります。バプテスマは象徴的な意味での誕生であると書かれています。(ヨハネ3:5参照)バプテスマとして知られる誕生を通して、私たちは罪から洗い清められ、末日聖徒イエス・キリスト教会の聖徒という新しい家族の一員になるのです。

バプテスマは私たちに 罪から清めてくれる

「すぐ立って、み名をとなえてバプテスマを受け、あなたの罪を洗い落しなさい。」(使徒22:16)アナニヤは、その後間もなく使徒パウロとなるタルソのサウロにこう説き勧めました。

私たちはバプテスマを受ける前に、自分の罪を悔い改め、イエス・キリストに従うことを約束します。(教義と聖約20:37参照)そして、バプテスマを受ける時、水によって象徴的に洗い



ILLUSTRATED BY KRISTY MORRIS

清められます。生まれたばかりの子供のように汚れなく、罪の意識から解放されるのです。成人してからバプテスマを受けた、韓国の金福子姉妹は、この清めについて次のように語っています。「自分の罪が取り除かれ、心が軽くなるのを感じました。私は世の誘惑と不安な気持ちに打ち勝てるように、毎日祈っています。」

ソルトレークシティのアイリーン・エリクソン姉妹は20代でバプテスマを受けた時、罪から清められたと同時に心の癒しを感じたことを、このように述べています。「教会に入る前、私は自分が犯した罪をほとんど意識したことはありませんでした。でも、罪の結果である苦痛を感じていました。バプテスマを受けた時、その苦痛から解放されたのを感じました。」

もし私たちが心から悔い改め、イエス・キリストに従うと約束したのなら、バプテスマを受けたのが8歳であろうと80歳であろうと、私たちは皆、罪から洗い清められるという祝福を受ける

ことができます。そして、バプテスマの時に交わした誓約を思い起こし、決意を新たにすることによって、この洗い清めという癒しの効果を保ち続けることができるのです。

●日常生活の中で経験する罪の結果には、どのようなものがありますか。

●バプテスマで交わした誓約を新たにし、バプテスマが与えてくれる新鮮な気持ちを感じるにはどうしたらよいでしょうか。

バプテスマは 新しい家族を与えてくれる

どの子供にも父親と母親があり、多くの子供には兄弟や姉妹もいます。それと同様に私たちがバプテスマにより「水から生まれる」とときには、福音のきずなで結ばれた兄弟姉妹のいる新しい家族が与えられます。私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になるのです。エリクソン姉妹はこのように回想しています。「私はバプテスマを受けた時、自分の家族から遠く離れて暮らしていました。でも、兄弟姉妹のいる新しい家族、しかも愛に満ちた家族の一員となったような気持ちでした。」

エリクソン姉妹がバプテスマを受けた時に所属したワード部には、よい家族に必要な特性、すなわち互いへの愛やよい模範、イエス・キリストに従う決意があったのです。

●あなたのワード部という家族の中で、責任感と愛を一層強く示す会員となるには、どうしたらよいでしょうか。

□

あの夜に感じた平安

アナ・モーラ・モンテレー

「アナ、アナ、起きてくれ。」せき立てるような声によろしく目を覚まし、はっとしてベッドから飛び起きました。外から聞こえたのは、姉の夫の悲痛な叫びでした。「急いでくれ。事故に遭ったんだ。お姉さんが病院にいる。」

それは1977年、コスタリカを離れ、カリフォルニア州ロサンゼルスに移住して来て、まだ4年目のことでした。姉が命を落としかけているというのです。ほかの家族から遠く何千キロも離れたこの地で。

ようやく病院にたどり着くと、階段を上り、エレベーターに乗って、集中治療室の場所を探し当てました。ドアを開けると、そこには何人もの医師と医療機器に取り囲まれた意識不明の姉

がいました。

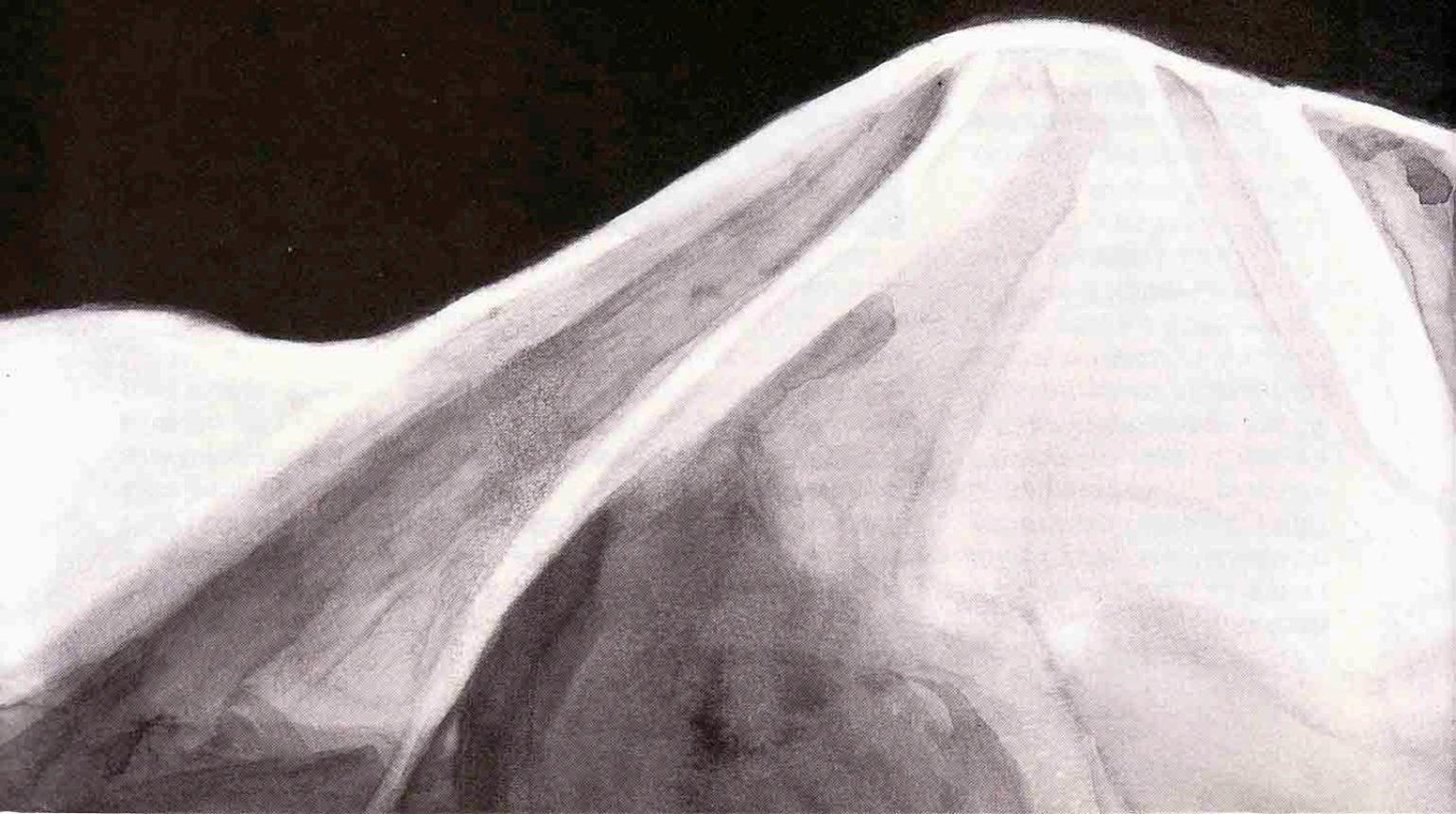
看護婦が私たちに気づき、私たちは外に出されてしまいました。一晩じゅう、寒い廊下で待ちました。空虚に壁を見詰めていても、時間だけが過ぎていき、心はまったく落ち着きません。医者がようやく話をしてくれましたが、見通しはあまりよくないとのことでした。

冷たい長いすに腰かけると、私は神権の力について考えました。姉は教会員ではありませんでしたが、ぜひとも祝福を受けてほしいと思いました。そして監督に電話をし、祝福をお願いしました。監督が引き受けてくれた時、私の胸は喜びでいっぱいになりました。もうこれでだいじょうぶだと確信したのです。

やがて監督が来て、姉に祝福を授けてくれました。そして私にも祝福をし、このように言いました。「主はお姉さんが最も必要とされている場所をご存じです。」もちろん私は、姉が最も必要とされている場所はこの地上であると信じていました。姉には養い育てなければならない3人の小さな子供がいるのですから。

事故から2日後、姉は息を引き取りました。主が姉をみもとに連れて行かれたのです。

しかし、今もあの夜不安に満ちていた私を包んだ平安な気持ちを覚えています。姉の1年目の命日、私は神殿で姉のために身代わりの儀式を受けました。私は固く信じています。神権の力は確かに存在すると。□





ILLUSTRATED BY DOUG FAKKEL



.....
どんなことを話すべきか

ただの会話とうわさ話とはどのように見分けたらよいのでしょうか。次の事柄を自分に問いかけてみてください。

- だれかについて話していることを、本人に話しても差し障りはないだろうか。
- その話は、衝撃的だったり、現実離れしていたり、ひどい内容だったりしてはいないだろうか。
- それは本人に都合のよい話だろうか、それとも不都合な話だろうか。
- それは事実に基づいた話だろうか、それとも憶測にすぎないのだろうか。
- 同じ事柄についてだれかが少し違った内容を話すのを聞いたことがないだろうか。もしあるとしたら、いずれの話も真実でないかもしれない。
- その話をしている人の動機は何だろうか。
- それを耳にした人は、心を高められ

ケーシー・ヌル

どうしたら
なくせるでしょう

軽率な、思いやりのない言葉は、人の評判を台なしにし、互いの関係を損ね、人生の行く末まで変えてしまうこともあります。うわさ話を避ける方法について考えてみましょう。



るだろうか、それともいやな気持ちがあるだろうか。

うわさ話が始まったら

あなたがうわさ話をしない人だとわかれば、友達ももっとあなたへの信頼を増すことでしょう。あなたが決して友達の悪口を言わないので安心するのです。でも、もしだれかがうわさ話を始めてしまい、自分がかかわりたくないときには、次のようにしてみてください。

- 話題を変える。
- 話題はそのままでも、肯定的な面を指摘する。たとえば、「彼女のそんなところ、今まで見たことないわ。いつもやさしくしてくれるもの」というように。
- 話の矛先をうわさ話をしている当人に向ける。「君はサムのことばかり好きじゃないようだね。どうして気に

入らないんだい」というように。

- 沈黙を保つ。沈黙は言葉より多くを語るということがよくあります。また、ひとりだけでうわさ話をするのもむずかしいものです。
- 感じたことをそのまま話す。たとえば、「私、あなたのこととても好きだし、一緒にいて楽しいけど、うわさ話をするときにはいつも嫌な気分になるの。もうやめましょうよ」など。

うわさ話に効く薬

うわさ話がやめられなくなってしまうことがあります。その習慣を断ち切るための方法には次のようなものがあります。

- うわさを流した後、自分がどんな気持ちになるかを考えてみる。自分に対してよい思いがしますか。反対に、だれかを褒めたときはどんな気持ちがあるでしょう。

■ 信仰簡条第13条、IIテサロニケ3：11、Iペテロ4：15を読む。

- 天父の愛を感じるために祈り、聖典を読む。自分自身についてよくない思いを持っているために、うわさ話をしてしまうことがよくあります。
- ほかにことに熱中する。うわさ話をしたくなったら、その代わりに建設的なことをしたり、言ったりしましょう。
- 動機をよく考えてみる。自分が話しているのは、その人のことを心配しているからでしょうか、それとも自分をよく見せたいためにその人のことを悪く言っているのでしょうか。
- 人々を神の愛する子供たちとして見る。悪口を言って、神の子供のひとりをおかしくしたいと思いますか。
- 自分も完全でないことを認める。自分の持つ欠点で、人から指摘されてもおかしくないようなことを挙げてみてください。できるなら、触れないでいてほしいと思いませんか。



上——カンファレンスの参加者と談笑するメリル・J・ベイトマン長老とマリリン夫人。

ヤング・シングル・アダルト、 ヨンドン 永同に集まる

ヤング・シングル・アダルトの兄弟姉妹が韓国全土から永同に集まり、友情と信仰を強め、さらに忠実に主に仕えるにはどうしたらよいかを学びました。永同はソウルから南に約250キロの人里離れた所にあります。

彼らは、講習会やセミナーをはじめとするさまざまな活動を通して、自分たちが神の息子、娘であり、変わることのない真理の原則を持つ教会に属していることを改めて学びました。また、積極的な方法で人々に影響を与える

には、福音の教えをどのように生かせばよいかも学びました。





このようなカンファレンスが韓国で最初に開かれたのは1976年のことで、当時ひとつしかなかった地方部から200人が参加しました。今回は、16のステーキ部と3つの地方部から、1,000人以上が参加しました。3人の地区代表も全員出席し、アジア北地域の会長として新しく召されたメルル・J・ベイトマン長老がカンファレンスを管理し、開会に当たってあいさつを述べました。

ベイトマン長老は話の中で、神の王国の成長をテントにたとえた、イザヤとニーファイの示現について触れました。まず、くいのひとつがしっかりと据えられ、次にもうひとつが据えられ、こうしてじゅうぶんな数のくいによってテントがしっかりと張られ、全世界をすっぽりと覆うようになると話しました。

ベイトマン長老は次のように語りました。「私は、独身成人の皆さんに、この伝道部において皆さんがどんなに大切な役割を担っているか理解していただきたいと思います。すべてのイスラエルの民は文字どおりひとつに集められます。……韓国の聖徒の皆さんは、この集合において重要な役割を担っているのです。」

このカンファレンスにより、多くの参加者はその決意を強められました。30歳のある兄弟はこう語っています。「私は伝道に出る決心をしました。今までは活発な会員ではありませんでした。でもこれからは、活発に教会活動に参加していけるよう、監督に頼んで何か教会の責任をいただくつもりです。」また、ある姉妹は次のように語りました。「自分たちがこれほど大きな組織で、もし一致団結したなら、福音を通してワード部や隣近所、地域や国家により影響を与えられることに、今まで気がつきませんでした。」

奉仕のお返しに

カリフォルニア州パロス・バーデスステーキ部のハーバーワード部の青少年は、これまで10年間にわたり、国境を越えて、メキシコのティファナスステーキ部の会員たちを助けてきました。家を建てたり、修繕したり、教会堂を改築したり、屋根を張り替えたり、庭を整えたりしてきたのです。今年は、ティファナの青少年がそのお返しをしました。

近隣の落書き追放キャンペーンの一環として、ティファナの聖徒たちはパロス・バーデスステーキ部にやって来て、バーデスの会員とともに高校の校舎を清掃し、壁を塗りました。

週末限定の入国許可証が与えられたメキシコの青少年たちは、何時間もかけて校庭のがれきを取り払い、落書きだらけの壁を塗り直しました。すべての仕事が終わった後、全員が集まり、それぞれ自分の国の食べ物と出し物を楽しみながら、夕べのひとつきをともに過ごしました。ティファナの聖徒たちは自国のダンスや音楽を披露しました。夜は会員の家に泊まり、日曜日の朝は合同の聖餐会せいさんに出席しました。

「彼らはほんとうに模範的な末日聖徒です」と、ハーバーワード部のデビッド・ボンド監督は語りました。「私たちのワード部に大いに貢献してくれました。」





ブラジル式キャンプ

教会の多くの地域では、ガールズキャンプは珍しくなくなっています。少女たちのおばあさんたちの中には、若いころガールズキャンプに参加した経験のある人もいるほどです。でも、ブラジルでは違います。キャンププログラムは始まったばかりで、関係者たちはとても喜び、興奮しています。

ブラジルでこのプログラムを計画するのは、非常にむずかしいことでした。

ブラジルには、世界でも有数の大都市、サンパウロとリオデジャネイロがあり、全国には87のステーク部が組織され、50万人近い会員がいます。少女たちの中には、やっと手に入れた重いキャンピング用具を持って家を出、長時間バスに揺られて集った人もいます。都市部にある自宅を離れたことのない少女たちにとっては、田舎の新鮮な空気、花、星空はまったく新しい経験と

なりました。

結果はすでに現われ始めています。「友情の花が開き、信頼関係が強まり、今まであまり活発でなかった人たちも教会に戻り、そして証が芽生えました」と、ある指導者は語っています。これこそガールズキャンプの真の姿ですね。

スペインのフェンシングチャンピオン

スペインのマドリードに住む、スサーナ・フェルナンデス・レポヨス・エレロー姉妹は、15歳にしてチャンピオンとなりました。全国フェンシング選手権大会に出場した62人の女性選手と競い合い、彼女はその年齢別グループにあってスペインで最優秀女性フェンシング選手の栄冠を勝ち取ったのです。

彼女がこの勝利を手にしたのは、長い間のトレーニングと犠牲があっこそでした。11歳の時にこのスポーツに出会ってから、スペイン語版の教会

機関誌「リアホナ」で末日聖徒のスポーツ選手についての記事を読みました。この話に感銘を受けた彼女は、フェンシングのチャンピオンになるという目標を決め、家族と友達からの励ましを受けながら、これまで数々のメダルやカップを手にし、そしてついに目標を成し遂げたのです。

スサーナは、年齢が満たなかったため1992年のバルセロナオリンピックには参加できませんでしたが、今、次期オリンピックに備えて頑張っています。



備えられた人々

アフリカの末日聖徒の 芸術作品と記録的写真

マージョリー・ドレーパー・コンダー

アフリカで教会が設立される何年も前に、主は道を備えられました。西アフリカでは特にそうでした。西アフリカの人々の中には、国外で生活し、そこで学んだ福音の知識を携えて帰国した人たちがいました。また、すでに福音を信じていた西アフリカの人々から福音を学んだ人たちもいました。このようにして、モルモン経に対する証^{あかし}を持った人たちが、ナイジェリアとガーナの両国に集まって来ました。彼らは専任宣教師からレッスンを受けたことがなく、中にはお互いに面識がないという人々もいました。

これと並行して、1959年から1978年にかけて、社用や教育事業に取り組むため、西アフリカに在住した末日聖徒がいました。その中には、ガーナ大学で家政科の設立に貢献したブリガム・ヤング大学教授団の一員パージニア・カトラーや、奥さんのチェリー・シルバーとともにアイボリーコーストの内陸部で砂糖きびによる農業関連産業を推進したパーナード・シルバーがいます。また、ユタ州プロボの出身で、現在七十人定員会会員であるメルル・J・ベイトマン長老は、ガーナ大学で教授を務め、後にガーナ政府の顧問のひとりとして働きました。このような人々が西アフリカで築いた友情の輪に助けられ、教会は、西アフリカで公的に認められる存在となりました。

1978年後半、教会は公式に西アフリカでの活動を開始しました。ふさわしい男性であればだれでも神権に聖任されるという、1978年6月の啓示によって、アフリカの会員にも自国の会員から導きを受け、福音の祝福を余すところなく受けられる道が開かれたのでした。最初の年、3組の夫婦宣教師がいただけだったにもかかわらず、西アフリカでは実に1,700人以上の人々が改

宗しました。

福音は、「備えられた人々、すなわち神のみたまにより備えられた人々にもたらされるのです」と七十人のアレクサンダー・B・モリソン長老は語っています。「学ぶに熱心で、理解するに早く、聞く耳を持ち、感受性が鋭く、霊的に敏感で、命のパンと水に飢え渴いているこれらの人々は、福音の訪れるその日のために長い間備えられてきたのです。」
〔「エンサイン」1987年11月号、p. 25〕

1978年にあの初期の宣教師が派遣されて以来、何百人という宣教師が後に続けました。その大半がアメリカとカナダ出身の夫婦宣教師でした。西アフリカからも、数多くの若い男女が宣教師として召され、母国でまた海外で奉仕しました。西アフリカは、末日聖徒イエス・キリスト教会の新たな伝道地のひとつとして、今日際立った位置を占めています。

西アフリカの教会員の芸術作品と記録的写真を紹介しましょう。これらの作品および写真は、ソルトレークシティにある教会歴史美術館に、「備えられた人々——西アフリカの末日聖徒」として展示されているものの一部です。アフリカの末日聖徒の福音に対する証を視覚的に表現した初期の作品と言えるでしょう。□

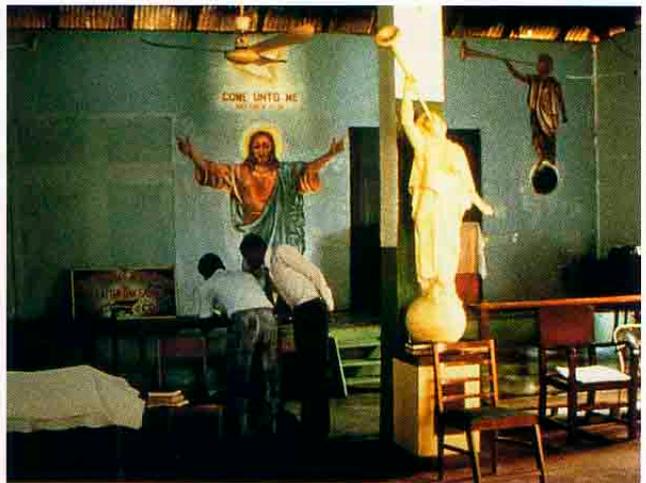
マージョリー・ドレーパー・コンダーは教会歴史美術館館長を務めている。

左——このナイジェリア製のつえは指導者の象徴で、スペンサー・W・キンボール大管長に贈られたものである。





下——ナイジェリアのクロスリバー州に住む教会員が作った旗。中にはナイジェリア国内のさまざまな行政区分を表わすナイジェリアの地図も描かれている。



上——教会が公式に西アフリカで活動を始める前に使用された、ガーナのケブコーストの礼拝堂。天使モロナイのセメント像(下)をはじめ、末日聖徒イエス・キリスト教会の象徴の数々が目に留まる。



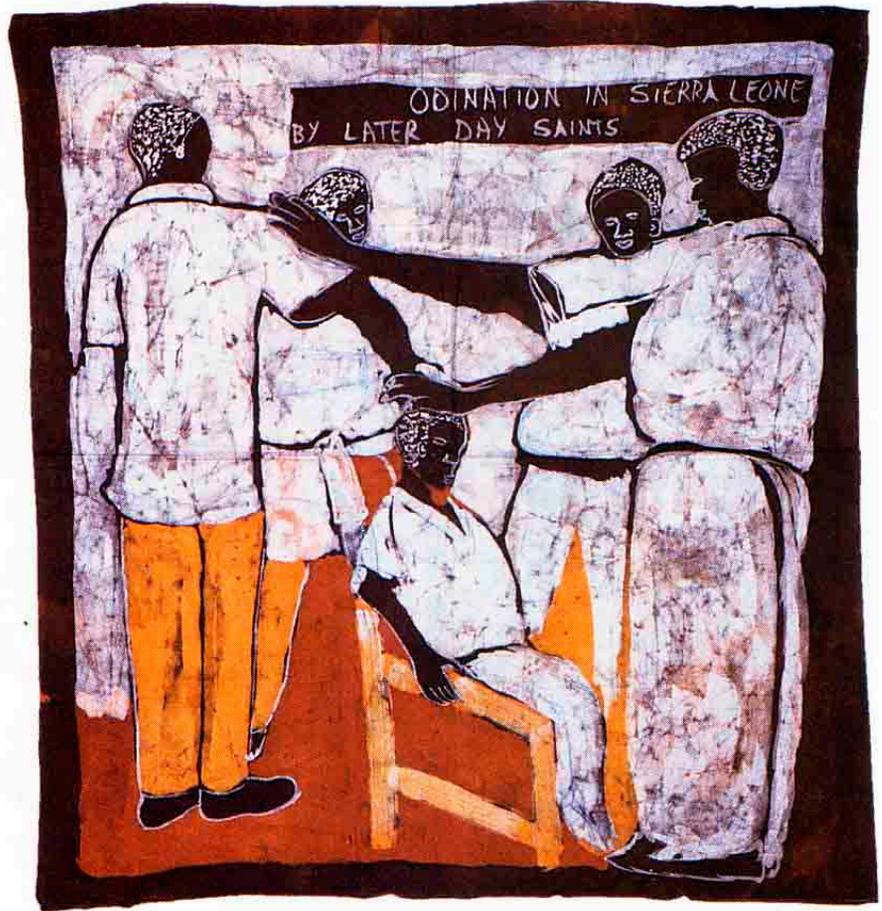


ナナ・ヤダイ・コージョ酋長^{しゅうちよう}は、ガーナ、
ミシンテン支部のジョゼフ・クウォメナ・オ
ットー支部長としても知られている。1988年
以来、彼はガーナのアシャンチ族で2番目に
高い位に就いている。

彼は1982年に末日聖徒イエス・キリスト教会
の会員となり、間もなく支部長に召された。
彼は福音に対する愛に導かれて、100人を上
回る人々に福音を説き、バプテスマを施した。
しかし、彼の生命は繰り返し危険にさらされ
た。そして彼や教会に対して、その活動を阻
止しようとする攻撃もなされた。

1988年、アシャンチ族の族長会議は彼に対し、
その高潔さにふさわしい地位、すなわち族長
の地位に就くよう申し入れた。オットー支部
長は3日間断食し、教会の地方部長に相談し
た。ふたりはアシャンチ族の族長会議の人々
と会合した。こうしてジョゼフ・オットーは、
伝統的儀式やアルコールの摂取、一夫多妻制
などの種々の慣例的行為を一切要求しないと
いう条件で、族長になることに同意した。

写真は、族長の位を示すケンチという衣装を
身に着けたコージョ酋長。



1992年、シエラレオネ出身の末日聖徒、エミール・ウィルソン姉妹が制作した、ろう染め。なじみ深い教会の儀式を描写している。——(左)バプテスマ、(上)神権の儀式。



この歴史的に価値のある写真には、初期のモルモンの開拓者たちについて学ぶ、ナイジェリア、エヌグウの初等協会の子供たちが収められている。彼らもまた、福音における開拓者である。



PHOTOGRAPH BY JANATH R. CANNON



アフリカの福音の 開拓者たち

E・デール・ラバロン

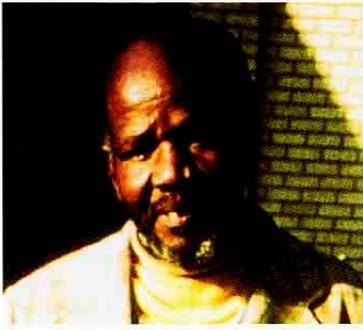
(記載のある場合を除き、写真も著者)

南 アフリカのソウェトに住むモーゼス・マーラングは、バプテスマを受けるまで16年もの間、忍耐強くしかし執拗に待ち続けました。この長い年月を振り返るとき、マーラング兄弟は自分をコルネリオになぞらえます。コルネリオは「天使の訪れを受けてなすべきことを教えられるまで、神のみ言葉を受けて教会に入る機会を長い間辛抱強く待ちました」とマーラング兄弟は言います。(使徒10：1-7参照) 現在67歳のモーゼスは、南アフリカのヨハネスブルク神殿で庭園管理人として働きながら定期的に神殿に参入しています。

1978年6月、スペンサー・W・キンボール大管長はすべてのふさわしい男性に神権と神殿の祝福を約束する啓示を発表しました。マーラング兄弟もその啓示の恩恵を受けた多くのアフリカ人のひとりです。啓示が発表されてから数年、福音と神権の祝福がアフリカの多くの人々に影響を与え始めるにつれて、福音の回復当時の人々が多くの祝福を受けたように、主がアフリカの人々を備え、みたまを注がれてきたことが明らかになりました。

南アフリカに教会が設立されたのは1853年でしたが、アフリカの黒人の間で伝道の業が正式に始まったのは、そ

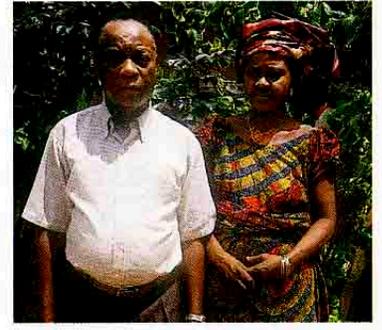
1978年6月に神権に関する啓示が発表され、末日聖徒イエス・キリスト教会は西アフリカに進出した。1979年3月4日、ナイジェリアのクロスリバー州のイコトエヨ村近くの小川で67人がバプテスマを受けた。その前日には117人がバプテスマを受けた。



モーゼス・マーラング



ジョセフ・W・B・ジョンソン



アンソニー・オビナと
フィデリア・オビナ

れから1世紀以上もたってからのことです。1960年、大管長会は南アフリカの伝道部長を解任されたばかりのグレン・G・フィッシャーに、ナイジェリアで教会の名前を名乗っているいくつかの宗教グループを調査するように要請しました。フィッシャー兄弟はどのグループも回復された福音に忠実であることを発見し、この人々のために宣教師の派遣を推薦しました。それから6年間、教会の指導者たちはナイジェリアでの伝道活動の開始を目指して政府の許可が得られるようあらゆる努力を続けましたが、実現には至りませんでした。そして、滞在許可が得られないまま、1966年、教会はナイジェリアでの伝道活動を断念したのです。

正式な伝道活動は進展を見なかったものの、バプテスマを受けていないアフリカの改宗者たちは、教会のパンフレットや靈感に満ちた指示を受けることができました。この信仰深い人々は、どんな労もいとわず教会との連絡を保つ努力を続け、その証と新たに学んだ知識を隣人と分かち合ってきたのです。

ガーナの

ジョセフ・W・B・ジョンソン

ジョセフ・W・B・ジョンソンは、

ガーナにおけるそんな開拓者のひとりです。ジョンソン兄弟は、1964年に祈りの気持ちを込めてモルモン経を読み、改宗しました。改宗した後のことをジョンソン兄弟はこう語っています。「ある早朝、その日の仕事の準備をしていると、天が開いてラッパを持った天使たちが現われ、神を賛美するのが見えました。私の名を3度呼ぶ声が聞こえました。『ジョンソン、ジョンソン、ジョンソン。もし私の命じるように私の業を行なうならば、あなたとあなたの国は祝福されるであろう。』私は身震いし、涙ながらに答えました。『主よ、あなたのみ力をお借りして、お命じになることは何でもいたします』と。その日以来、私はみたまによって導かれるまま、モルモン経で読んだメッセージを町から町へ伝えて歩いたのです。」

それから14年後に宣教師がガーナに到着した時、バプテスマを受けていないおおぜいの会衆が、ジョンソン兄弟によってすでに教会の名の下に複数のグループに組織されていました。この初期の改宗者の中には教会に正式に加わらなかった人たちもいましたが、多くはバプテスマを受けて正規の教会員になりました。後に大きな成功を収めるに至った伝道活動の基礎が、すでに

築かれていたのです。

ナイジェリアのアンソニー・オビナ

ナイジェリアのアンソニー・オビナも、アフリカの初期の開拓者のひとりです。1960年代後半のある晩、オビナ兄弟が「眠っていると、背の高い男の人が〔夢に〕現われて非常に美しい建物に連れて行かれ、部屋をくまなく案内されました。」そして1970年、古い「リーダーズ・ダイジェスト」誌で『モルモンたちの行進』という題名の記事とソルトトレーク神殿の写真に巡り会います。「それは、確かに夢で見た建物に間違いありませんでした。」このことがあってからオビナ兄弟は教会本部に手紙を書いて、末日聖徒のパンフレットを取り寄せました。

1978年、オビナ家族は神権に関する啓示を知り、大管長会に次のような手紙を送りました。「私たちが主の囲いに招き入れるため、長時間神殿の上の部屋で主に祈ってくださったことに感謝いたします。また、皆様と私たちの祈りを聞いてくださった天父に感謝します。」

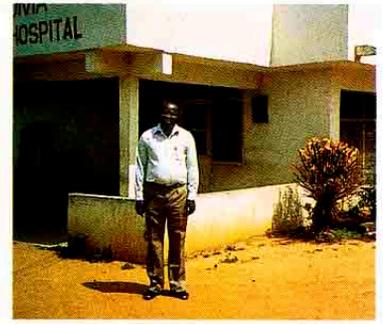
オビナ兄弟の教えと指導の結果、後年ナイジェリアに宣教師がやって来た時、多くの人々が福音を聞くように備



アドジェイ・クワメ



エマニュエル・アブ・キシと
エリザベス・キシ



夫婦で設立したデゼレト病院
とキシ博士

えられていました。その後、ナイジェリアで最初の末日聖徒の教会堂が、アボムバイセにあるオピナ家族の自宅近くに建設されました。

ジンバブエのアドジェイ・クワメ

ジンバブエで教職に就いていたアドジェイ・クワメは、みたまに促されて教会に導かれました。「私はまことの教会を探し求めていたのです。当時、繰り返し教会堂の夢を見ました。ある日、ジンバブエのクウェクウェの町を通っていた時、私はその夢に出てくる教会堂を見かけたのです。なぜいつもこの教会堂の夢を見るのか知りたくて、その教会堂に行ってみることにしました。」ある日曜日にその教会へ行ってみると、「まるで昔からよく知っている友人といるように感じたのです。」

クウェクウェ支部の会員たちは、礼拝行事の一環として証を述べていました。その時クワメ兄弟も説教台に立ち、神を信じていることと教会員になりたいという希望を述べたのでした。そしてクワメ兄弟は伝道部長夫人のハムステッド姉妹に紹介されました。「その時実際何がふたりに起こったのか説明のしようもありませんが、気がつくとい私は涙を流していました。その時の感

情は口で言い表わすことはできません。私の重荷はすべて取り除かれ、まるで見知らぬ土地に行っていた自分が故郷に帰って来たように感じたのです。」

ガーナのエマニュエル・アブ・キシ

医学博士のエマニュエル・アブ・キシはガーナの初期の改宗者のひとりです。人生の大半を霊的な充実を探し求めて悩んでいました。「聖書は何度か読み、さまざまな教会にも行ってみましたが、どの教会の在り方にも満足できないでいました。私にはキリスト教自体は有意義なものなのに、世の教会は空虚に感じられたのです。それでも私は何かまだ自分が知らない、世の教会が教えている以上のものを持った教会があるに違いないと確信していました。」医学部を卒業してからもキシ博士は聖書の研究を続け、自分のイメージどおりの教会を見つけたいと望み続けていました。

その後、エマニュエルは医学奨学金を得てイギリスに留学しました。留学2年目に妻が健康上の理由で看護婦の仕事辞め、数カ月自宅で静養することになった時です。ある日妻のエリザベスが電話してきて、もう仕事に戻れると言った時には大変驚きました。ふ

たりの青年が来て神のみ言葉を教えてくれたのだと、エリザベスは説明しました。レッスンの途中でキシ姉妹は祝福をしてくれるように頼みました。「ふたりは出直して来て、妻に油を注いで祝福してくれたのです」と、キシ博士は言います。「妻によると、油が注がれた時、頭のとっぺんから足のつま先までじゅうを電流のようなものが走ったと言います。そして祝福の儀式が終わった時、直ちに癒されたのです。」

キシ博士はモルモン経、「^{キリスト}イエス」そして「奇しきみわざ」を読み上げ、ジョセフ・スミスの証と大いに共鳴するものを覚えました。「ジョセフ・スミスが私と同じ悩みを持っていたことに気がついたのです。最初の示現には感動しました。自分をジョセフの立場に置き換えて、ジョセフが経験したすべてを追体験できたように感じました。私にとってジョセフはわかりにくい存在ではなかったのです。」

バプテスマを受けてからキシ家族はガーナに戻り、キシ博士は伝道部長会で働きました。また、キシ家族はアクラにデゼレト病院を設立しました。そして1992年、ガーナにふたつのステーク支部が組織された時、キシ兄弟は地区代表として召されました。



アフリカ



上——1950年代後半から60年代、70年代にかけて、公式な伝道活動もなく、ほとんど互いの存在も知らないまま、モルモン経の証に導かれた改宗者たちがナイジェリアとガーナの両国で組織されていた。1978年、正規の宣教師たちはあちこちの村で、末日聖徒になりたいと切望する全村民に心からの歓迎を受けた。右——ガーナのプリシラ・サンプソン・デービス姉妹はモルモン経、教義と聖約、高価なる真珠を母国語に翻訳した。



ガーナの プリシラ・ Sampson - デービス

プリシラ・ Sampson - デービスが最初に宣教師に会ったのは、オランダに住んでいた1964年のことです。夫は宣教師の話の聞こうとはしませんでした。 Sampson - デービス姉妹は興味を引かれ、モルモン経を読みました。その後家族がガーナに戻った時、姉妹はジョンソン兄弟のグループが教会の教義を研究しているのを知り、活発に参加するようになりました。そして14年後、彼女と子供たちはガーナに派遣された宣教師によってバプテスマを受けた最初のグループに加わったのです。

教会に入って後のある日曜日、彼女は示現を見ました。そこは聖餐会せいさんのようでした。白い衣服に身を包んだ人が説教台の前に立ち、姉妹を招いています。「私は行ってその横に立ちました。すると彼は、振り返って礼拝堂の人々が聖餐会を楽しんでいるかどうか顔を見ているようにと言いました。言われたとおりにすると、何人かが頭を垂れているのが見えました。その人は、賛美歌を歌っていない人たちがいるのはなぜかと尋ねました。私は『学校に行ったことがないので英語が読めないからです。歌うことができないので頭を

垂れているのです』と答えました。

するとその人は、『英語が読めないために賛美歌を歌うことのできない兄弟姉妹たちを助けたいとは思わないか』と言いました。」

姉妹は書くことがそれほど得意でなかったにもかかわらず、「やってみます」と答えていました。

夢はそこで終わりました。 Sampson - デービス姉妹はすぐに『イスラエルの救い主』を母国語に翻訳したのです。そして姉妹は続けてモルモン経、教義と聖約、高価なる真珠、福音の原則、そしてそのほかの教会の出版物を翻訳し始めました。(以上現在出版準備中)モルモン経の翻訳許可を申請するに当たって、彼女はこう言っています。

「伝道部長と翻訳について話し合った時、伝道部長は翻訳を続けるようにと言ってくれました……。

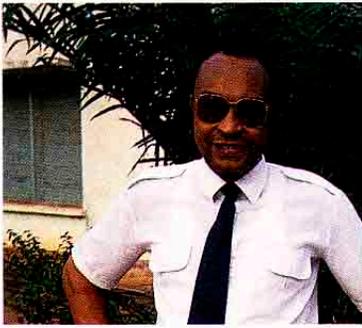
モルモン経を翻訳しながら心はよい思いで満たされました。そして、この仕事は確かに主が望んでおられるのだと確信できました。ときどき翻訳中に、ある単語や語句を使おうとすると、急にまるでだれかが後ろに立って話しかけているように、『いや、こちらの言葉を使いなさい』とか、『その言葉はいけない』という声が聞こえてくるのです。私は消しゴムをいつも離しませ

んでした。なぜなら、みたまがいつも教えてくださっていたからです。」

ナイジェリアの クレメント・エンワフォル

会員たちはこの新たな信仰を熱心に、しかも非常に開放的に分かち合っています。たとえば、クレメント・エンワフォル医師は、患者の父親であるルーベン・オヌオコアを通して福音に導かれました。エンワフォル医師は100万を超えるナイジェリア人の首席医務官であり、アバでは非常に高名で信望のある市民です。ある日、そのエンワフォル医師の所に健康診断のため娘を連れて行ったオヌオコア兄弟は、きっぱりこう言い切りました。「りっぱな肩書きや地位があっても、まだエンワフォル医師には欠けていることがひとつあります。それは『この宇宙であなたに生を与えてくださった主に奉仕すること』です。」

この大胆な言葉に接してから程なくして、エンワフォル医師は福音を受け入れました。こう言っています。「まるで生まれ変わったように感じました。」1988年5月15日、ニール・A・マックスウェル長老がナイジェリアのアバに西アフリカ初のステーキ部を組



クレメント・エンワフォル



ロバート・イスラエル・ムーヒラ



ベンソン・カサーエと
ニクソン・カサーエ

織した時、エンワフォル医師はバプテスマを受けてから6カ月足らずで高等評議員として按手任命されました。

ウガンダのエドワード・オジュカ

アメリカの初期の教会と同様に、アフリカのそれぞれの国でバプテスマを受け、アフリカで始まったばかりの教会に入った人の大多数は、前述のような劇的な霊的経験をすることはありませんでした。しかし、みたまはそのような人たちに同様に強く働いて、主の王国の奉仕のために確実に備えられたのです。

ウガンダのエドワード・オジュカもそんな教会員のひとりです。オジュカ兄弟が宣教師に会ったのは、留学中のオーストラリアのパスでした。4カ月間福音を学んだ後、エドワードはバプテスマを受けました。しかし、伴侶のグレースは福音に興味を示しませんでした。今までの教会で満足していたからです。「無理強いはしませんでした。妻が福音を理解する日が必ず来ることは、一点の疑いもなくわかっていましたからです。」

エドワードは1987年に修士課程を終えてウガンダに戻りました。その後ブリガム・ヤング大学で博士号を取得す

るために勉学を続けることにしました。「いくつもの奇跡」に助けられ、必要な奨学金を得ることができたエドワードは、1988年、妻と3人の子供を伴ってユタ州のプロボに移り住みました。そして3カ月後、グレースはバプテスマを受け、さらに、1年後、家族は神殿で結び固めを受けることができたのです。

「真理こそ教会の力です」とエドワードは言います。「私の人生の望みは奉仕です。社会でも教会でも、今までの勉学と教育を人を助けるために使うことができばうれしく思います。」

タンザニアの

ロバート・イスラエル・ムーヒラ

地域で最初にバプテスマを受けた人の多くは、友人や家族やほかの教会から疎外されます。しかし、みたまが彼らを離れることはありません。

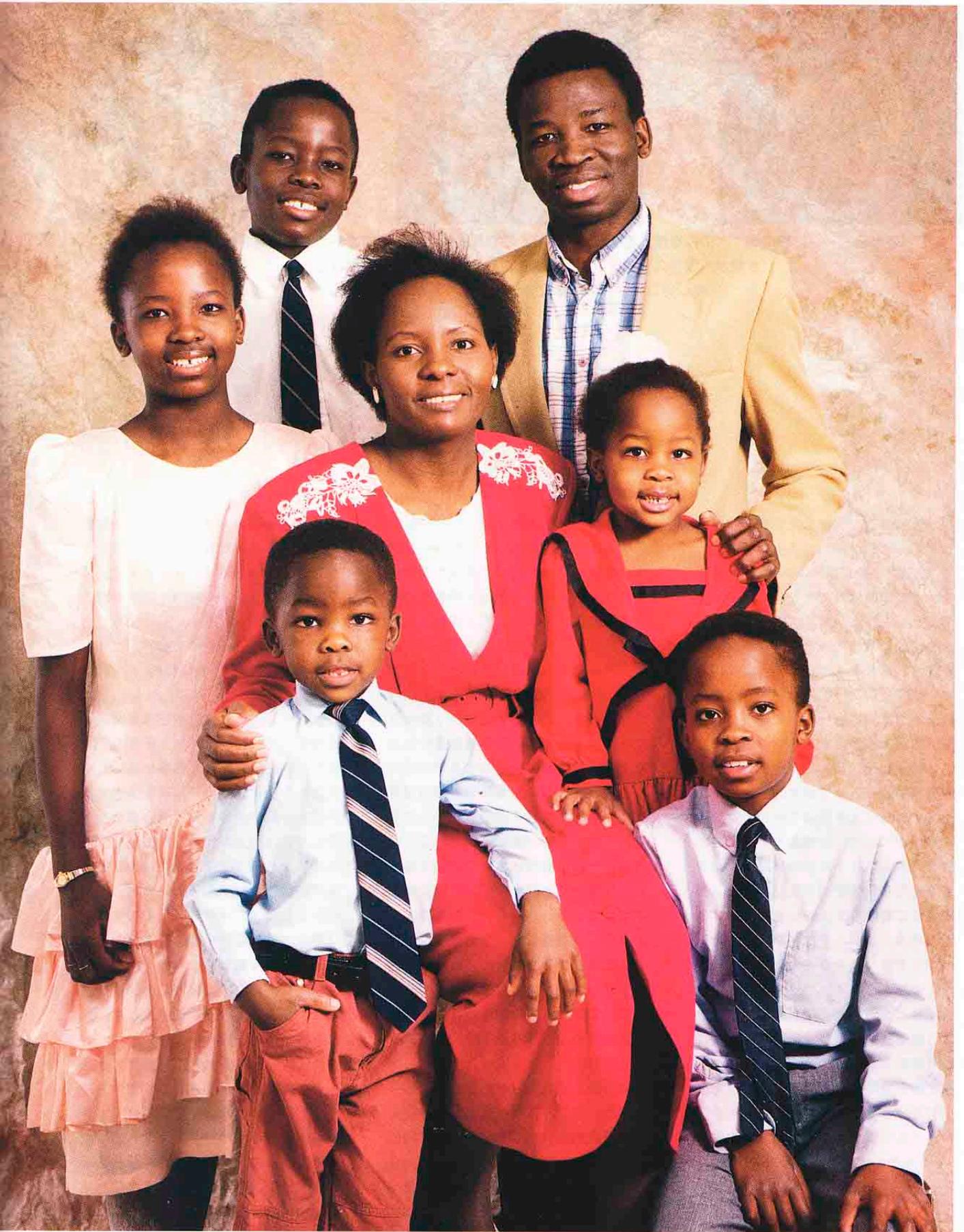
ロバート・イスラエル・ムーヒラはタンザニアの初期の改宗者です。ムーヒラ兄弟が初めて末日聖徒の集会に出席したのは、働きながら勉学していたエジプトでのことです。教会で夫婦の宣教師に会ったロバートは、レッスンを受けて改宗しました。ロバートは1991年の5月、長老への聖任を機会にタンザニアに戻って家族に福音を伝え

ることにしました。しかし、タンザニアの首都ダルエスサラームから車で3日、距離にしてほぼ1,600キロ離れた故郷の村に帰ってはみたものの、家族を改宗する努力は実りませんでした。

6カ月後、ロバートはケニアのナイロビまで出かけて行き、伝道部長から聖餐の儀式を自分で執り行なう許可を受けました。「聖餐の大切さを知っていたからです。長期間聖餐を受けることができなくて霊的に元気をなくしていましたから」とロバートは言います。家に戻ったロバートは、礼拝集会に家族を招いては断わられ続けました。そのためロバートはたったひとりで集会を開きました。その集会の様子を、ロバートは次のように簡単に説明しています。

「まず聖餐用の水とパン、そして手を清める水と小さなタオルを用意します。ひとりで声を出して賛美歌を歌います。賛美歌は自分のものを持っていました。その後で開会の祈りを捧げ、ひとりだけでビジネスはありませんか

エドワード・オジュカと家族。エドワードは現在博士号、また妻のグレースは学士号取得に向けて、現在ブリガム・ヤング大学に在籍中。





左から右——日曜の朝、木の枝を使ってチュルの聖徒たちが集会所に使うあずまの掃き掃除をする子供たち。
水槽がバプテスマフォント用にナイロビからチュルまで運ばれてきた。
新しいフォントの中に立つジュリアス・カスーエ兄弟。

ら、聖餐の歌を歌って聖餐の準備に入ります。それからひざまずいて祝福して、聖餐をいただき、いつもしているように聖餐の後は布で覆い、自分で話を、つまり証をします。そして日曜学校のように歌を歌ってから『福音の原則』を読みます。それから、いったん祈りで会を閉じ、次は神権会を開きました。賛美歌を歌って祈り、『メルキゼデク神権者用個人学習ガイド』から選んだレッスンを勉強しました。それからもう一度賛美歌と祈りで会を閉じました。」

家に戻って2カ月してから、ロバートはタンザニアに派遣された最初の宣教師、ラーベイ・カフーンと夫人のジョイスから手紙を受け取りました。通訳として奉仕してほしいと要請してきたのです。ロバートは快諾し、ふたりのいるダルエスサラームまで赴きました。そしてダルエスサラーム滞在中に、ナイロビからの改宗者ジョイ・ナシウマと出会って結婚し、1993年7月、ふたりは南アフリカのヨハネスブルク神殿でその結婚を結び固めることができました。

ケニアのベンソン・カスーエと ニクソン・カスーエ

ケニアの初期の改宗者の中にベンソ

ン・カスーエとニクソン・カスーエというふたりの兄弟がいました。ベンソンは18歳くらいの時にアメリカ人のデニス・チャイルズ兄弟とその家族に福音を紹介されました。チャイルズ兄弟はケニアで研究活動していた獣医で、ベンソンはその手伝いに雇われたのでした。ふたりの間に友情が芽生え、ベンソンは教会に関心を持つようになりました。そして弟にも福音を紹介したのです。宣教師が初めてケニアに送られてきた時、このふたりの兄弟は宣教師とともに福音を学び、バプテスマを受けたいと望みました。しかし、「いつまでたってもバプテスマが受けられる兆しはありませんでした。教会が正式な登録を拒否されていたからです。4年ほど待ちました。でき得るかぎりのことをしましたが、バプテスマを受けることはできませんでした。神が私を試しておられるのかもしれないと思い、繰り返し断食して祈り続けました。」

教会の正式な登録が認められなかったため、バプテスマを受けたいと望む人は政府から特別な許可を得なければなりません。1985年、家庭で自分たちだけがバプテスマを受ける許可を得、ふたりのカスーエ兄弟はようやくバプテスマを受けることができました。そ

して1986年、ベンソンとニクソンはケニア人初の専任宣教師として、ベンソンはアメリカのカリフォルニアに、ニクソンはワシントンD.C.に召されました。

チュルの聖徒たち

ベンソンとニクソンの兄弟は伝道終了後それぞれ神殿で結婚し、福音を分かち合い続けました。教会に紹介した人たちの中には兄のジュリアスもいます。4年間求道者として教会について学んだ後、ジュリアスは教会に改宗してケニアの首都ナイロビの南東約250キロの農村地帯にあるチュル村に移り住みました。ジュリアスと妻のサビナはその支部の中心的存在となって活動するようになりました。以下のチュルの聖徒たちの経験は、アフリカじゅうの聖徒たちの信仰を代表しているとも言えます。

チュルの聖徒たちは、礼拝用に40人ほどを収容できる小さなあずまやを建てました。壁は木の枝を組み立てて作り、屋根は波型のトタンとやしの枝でできていました。毎週日曜の朝には小さな子供たちが木の枝をほうき代わりにして建物を掃いて回りました。

ほかの地域から隔離された未開発な

環境のため、バプテスマのためにも特別な配慮が必要でした。バプテスマフロント用にナイロビから水槽が運搬されてきました。井戸から必要な水をくみ上げてフロントまで6キロの道を運ぶのに5時間かかりました。そのうえ、バプテスマを受ける人たちが水をじゅうぶんかぶれるように、10人の大人がフロントの中に立って水位を上げなければなりません。最初のバプテスマ会を目指して40人の求道者がレッスンと面接を受けました。この人たちがバプテスマを受けて教会に加わると支部の会員数は2倍近くに跳ね上がりました。1993年8月現在、チュルにはふたつの支部があり、会員数は合わせて350人を数えています。

1992年、チュル地方は深刻な干ばつに襲われ、聖徒たちは飢えに悩まされていました。ラリー・ブラウン伝道部長と当時チュル支部長を務めていたジュリアス・カスーエ兄弟の指示の下に、聖徒たちを苦しみから救うため3,400ポンドのとうもろこしと豆を搬入することになり、夫婦で伝道していたテッド・マクニール夫妻は、この食糧輸送のためにナイロビから非常に厳しい旅をすることになりました。マクニール長老は当時を思い出してこう言っています。

「村から8人の女性が手伝いに来ていて、トラックの前の大きな火山岩を転がしては道を作っていくのです。あんなに重労働に耐える女性は見たことがありません。私はずっと建設関係の仕事に従事していましたが、あんな部下がいたらと思いましたよ。」

17袋の食糧を積んだトラックが到着した時、村は喜びであふれました。カスーエ支部長夫妻は夜を徹してかゆを作り、飢えて衰弱して床から起き上がれない多くの聖徒たちに届けて回りました。そして支部長は、全家族を訪問して何が必要かを調べました。

教会員を将来の緊急時に備えるために、干ばつに強い作物を作る計画が立てられました。しかし、いかに干ばつに強い作物でも、ある程度の水分がなければ育つものではありません。ところがその地域には、2年近く一滴の雨も降らなかったのです。そこで1992年10月21日、教会員40人と教会員ではない60人の村人が集まって作付けをし、その後で主に雨の祝福を願う特別な断食を行ないました。そして教会の映画「天の窓」が、電気のある数少ない公営施設で上映されました。それから1週間とたたないうちに待望の雨が降ったのです。作物も、そして人々の信仰も成長しました。そしてその年、チュ

ル村は豊作に恵まれたのでした。

人皆神のみ前に等しく

福音の回復の初期のように、改宗者が福音を分かち合い、チャレンジを乗り越えようと努力するにつれ、アフリカにおける教会は急激に成長していきました。神権の啓示から15年たった現在、アフリカの黒人聖徒数は教会初期の成長に匹敵する勢いで成長を続けています。主はまさに「万人が主の御許へ来て主のめぐみにあずかるように招きたもうている」のです。「それであるから、主の御許へくる者は黒人と白人、奴隷と自由人、男と女の区別なく誰も拒みたまうこともない。また主は異教徒さえもかえりみたまうから、神の御前には……みな平等」なのです。(IIニューファイ26:33)

主がアフリカの人々を愛し、忍耐強いこの民を祝福したいと望んでおられるのは明らかです。教会はアフリカの聖徒たちの生活に大きな影響を与え、彼らもまた同様に教会に大きな影響を与えており、将来も与え続けることでしょう。□

E・デール・ラバロンはブリガム・ヤング大学の教会歴史と教義の准教授である。



永遠に至る旅

リサ・A・ジョンソン

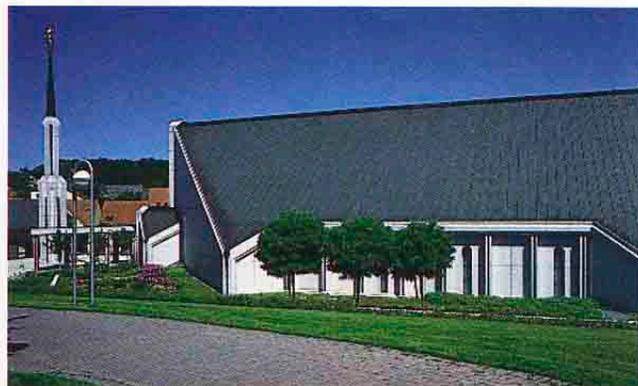
カナリア諸島

ポルトガル

モロッコ



PHOTOGRAPH BY LISA A. JOHNSON



PHOTOGRAPH BY PEGGY JELLINGHAUSEN

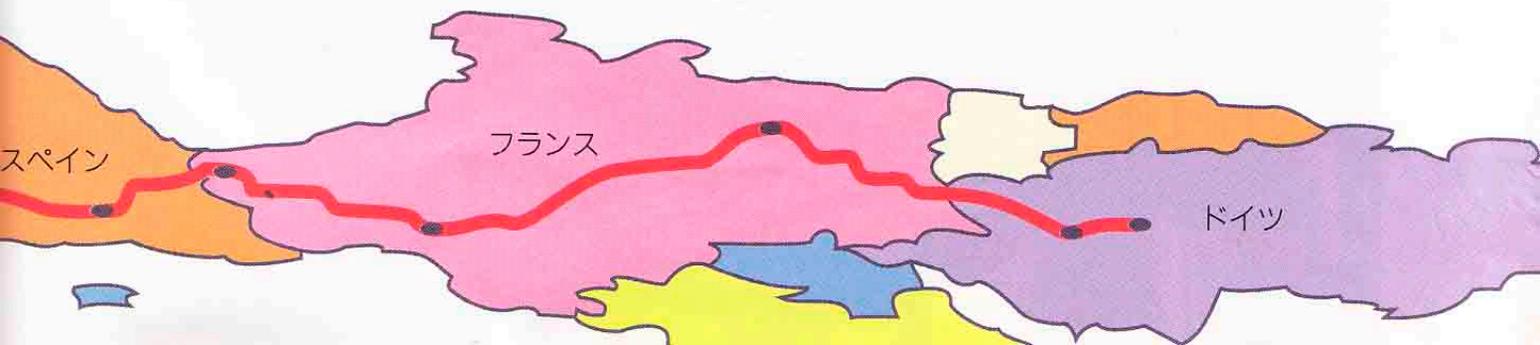
神殿に行くためには、海を越え、
3つの国を横断しなければなりません。

元 気のよい8人を、40時間小さなワゴン車の中で混ぜ合わせます。それに故障と雨、車酔いと船酔いを加えると、何ができあがるでしょうか。マレロー家族の場合は、「天国」ができました。

この世から永遠にわたる結び固めを受けるために家族で神殿旅行をした15歳のラケルは、「これまででいちばん霊的な経験でした」と語っています。

皆さんの多くは、神殿に参入するのにマレロー家族ほど犠牲を払う必要はないでしょう。彼らの住むテネリフェ島はスペイン領のカナリア諸島のひとつで、モロッコの沖合い約50マイル(約80キロ)に位置しています。マレロー家族が神殿に行く準備を整えた当時、儀式を受けられるいちばん近い神殿はドイツにありました。ですから、彼らはそこを目指して、海を越え3つの国を横断して旅をしたのです。

マレロー家族、つまりルーシー(7歳)、ファビオ(9歳)、オリバー(11歳)、ラケル(15歳)、デスティレー(17歳)、オスカル(19歳)そして両親のミゲルとアンヘラの全員が飛行機を使っていたら、旅費は法外な額になった



ことでしょう。実際、ミゲルが大工仕事をし、ほかの皆もそれぞれアルバイトをして2年間働き、やっと彼らの取った方法で旅行するだけのお金が得られたのですから。

マレロー家族が取った方法とは、ワゴン車の旅でした。ミゲルがワゴン車を改造して、ふたつのベッドを備えたキャンプ用自動車にし、皆で車ごとフェリーに乗り込んだのです。こうして海上を旅することから始めましたが、スペインまでは500マイル(約800キロ)ありました。

「みんな船酔いをしました。ですから、再び陸を見た時は大喜びでした」とラケルは言います。

しかし、それは旅行のほんの始まりにすぎませんでした。この先、何時間も何時間も車を運転してスペイン、フランス、ドイツを横断し、夜は星空の下で眠るのですから。「退屈さを紛らすため、スペインのナンバープレートを見かけると、クラクションを鳴らしては手を振りました。それから、知っている賛美歌とスペインの歌は全部、何度も何度も歌いました」とデスイレーは言います。

「パパが運転して修理もしたわ」とラケルが言います。とりわけ電気系統が故障した時など、夜運転しようとするれば、数分ごとに止まってヘッドライトを修理する必要がありました。やっとのことでフランクフルトに到着した時、車を道路の片側に寄せ、夜明けを待ちました。明るい中を、迷わずに神殿まで行くためでした。

しかし、やっぱり迷ってしまいました。神殿はフランクフルト郊外のフリードリヒスドルフにあるらしいのですが、ドイツ語がうまく話せず、マレロー家族はなかなかたどり着けません。結局、スペイン語のできるタクシ

ー運転手にお金を払って、誘導してもらいました。

「ついに、てっぺんの天使モロナイを見つけた時は、すごうれしかったわ」とラケルが言います。「きれいでした。苦勞してやっとたどり着けたから余計にそう感じました。」

さて、彼らは神殿の中でどんな経験をしたのでしょうか。「結び固めを受けたのは、とてもすばらしい経験でした。小さな子供たちまでみんな白い服を着て、ほんとうに美しいと感じました。今、私たちは、愛する人たちと永遠と一緒に暮らせると確信しています」とデスイレーが言いました。

マレロー家族は神殿で4日間過ごしました。両親は結び固めをし、年長の子供たちは、死者のためのバプテスマを受けました。やがて神殿を去る時が来ました。皆なかなか出発する気になれませんでした。これから長く退屈な道のりが待ち構えていると思うとなおさらでした。

しかし、彼らの人生はこの4日間で変わりました。「言い争いも少なくなりました。自分たちが永遠の家族であることがわかったからです」とラケルが言います。

デスイレーもこう語っています。「あの旅行は、人生にも似た経験でした。私たちは困難な時を乗り越え、一生懸命に働かなければなりません。でもそうすることで日の光栄の王国に行けるのなら、努力する価値があると思うんです。旅行の時も私たちは、たくさんの犠牲を払ったので、みんなで一緒にたどり着くことができたんです。」□

神殿に入るためには

神殿訪問には、多くの準備が必要です。神殿に参入する場合、死者のためのバプテスマを受けるためであっても、家族の結び固めであっても知っておくべきことがいくつかあります。

●12歳から18歳までの人は、「限定推薦状」が必要です。この推薦状

を受けるためには、監督との個人面接が必要になります。男性はアロン神権を受けていなければなりません。

●神殿に事前に電話を入れ、自分が受けようとする儀式の日時を予定表に書き込む。

●神殿に参入する場合は、安息日の服装を心がけるべきです。神殿内

では特別な白い衣服に着替えます。

●この経験が人生で最も大切な靈的経験のひとつになることを心に留めてください。戒めを守り、祈り、聖典を勉強し、日の光栄の家族として愛に満ちた態度でふさわしく生活するなど、できるかぎり早い時期から備えてください。□

十二使徒定員会会員

マービン・J・アシュトン長老逝去

1994年2月25日、十二使徒定員会会員のマービン・J・アシュトン長老がユタ州ソルトレークシティ内の病院で逝去した。享年78歳。葬儀は3月2日ソルトレーク・タバナクルで行なわれた。

マービン・J・アシュトン長老

—友、擁護者の死—

十二使徒定員会会員マービン・J・アシュトン長老の教えは愛と平安の教えであり、主の助けがあれば、いつでも悔い改めてやり直すことができるという確信を与えてくれるものでした。

静かでありながら力に満ちたその声は、1994年2月25日、ソルトレークシティ内の病院でアシュトン長老が78歳の生涯を閉じた瞬間に、もはや聞けなくなっていました。しかし、その教えはアシュトン長老の説教に聞き入ったことのある人々の心にいつまでも残るでしょう。アシュトン長老の教えは人々に人間の真の姿と可能な行く末を示すものだったからです。

「私たちは何のためかわからず強いあこがれを感じるがありますが、おそらくそれは私たちの心の中心である主を求め、主から離れず、この世が与えるものよりもより高く、より良く、より満ち足りたものを求めているのではないのでしょうか。……郷愁の念がこの世で正しく生活するのに必要な動機となり、天の家へ帰り父なる神と共に永遠に住めるように……。」(『郷愁』「聖徒の道」1993年1月号、p.27)アシュトン長老は、自身にとって最後となった総大会の説教の中でそのように語りました。

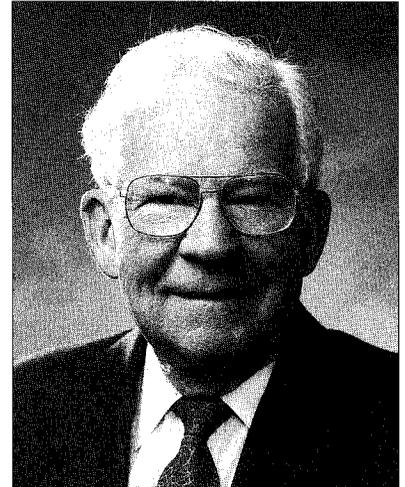
アシュトン長老の葬儀は、3月2日、ほぼ満員のソルトレーク・タバナクルで行なわれました。大管長会からはゴードン・B・ヒンクレー第一副管長とトーマス・S・モンソン第二副管長が話者として壇上に立ち、十二使徒定員会のダリン・H・オークス長老、七十

人のジェフリー・R・ホランド長老、そしてアシュトン夫妻の子息であるスチーブ・K・アシュトン兄弟とM・ジョン・アシュトン兄弟も話をしました。

オークス長老はその話の中で、アシュトン長老についてこう語っています。「若い人々ときわめて親密な関係を維持している人でした。心が広く、思いやりがあり、慈悲の心に満ちた賢明な方でした。アシュトン長老の用意するプログラムは、可能なかぎり人の成長のために配慮するものでした。……助けを必要とする人のために働くというアシュトン長老の決意は固く、終生変わりませんでした。」

モンソン副管長はアシュトン長老を次のように評しました。「人間の高貴な尊さを信じる人でした。どの人にも神となるべき力が備わっていることを理解していて、どの人ともそのように接しました。つまり、相手の過去の姿に目を向けるのではなく、その可能性、あるべき姿を心に留めました。……マービン・J・アシュトン長老は、機会を生かし、必要な行動を起こし、称賛の言葉を忘れず、神と同胞のために働くことをすべての人々に教えました。アシュトン長老は実に愛の深い人でした。」

ヒンクレー副管長は、ソルトレーク神殿でアシュトン長老が十二使徒の兄弟たちに残した最後の証を紹介しました。「『心に浮かぶひとつの言葉があるとすれば、それは「感謝」という言葉です。この場に臨み、神のみ業に携わ



れるという事実に感謝します。私たちはときとして、急ぎすぎではないという点にもっと心を留めなければならないことがあります。主がこのみ業を指導し、私たちの置かれている状況を理解していらっしゃるからです。……私は主を愛し、主が与えてくださった祝福に感謝しています。」

アシュトン長老は1971年12月2日に十二使徒定員会会員に聖任されました。アシュトン長老の使徒としての先任順位は、亡くなる時点で、ベンソン大管長から数えて6番目でした。十二使徒定員会会員になる前は、1969年10月3日から、十二使徒補助として働いていました。

1915年5月6日、ソルトレークシティでマービン・O・アシュトン、レイ・ジェレミー・アシュトン夫妻の間に誕生したアシュトン長老は、父親の名前にちなんで命名されました。アシュトン長老の父親は、その後の1938年から、亡くなる1946年まで、教会の管理監督会の一員として働いています。幼いマービンの両親は、その3人の息子と3人の娘たちにとって、誠実と奉仕の模範でした。家庭では、福音の標準を守り、教会で奉仕することが当たり前になっていました。

勤勉もここでは当然の家風でした。

マービン・Jはウサギとハトを飼い、家族のものだった約2,400坪の農場で働き、高校時代、大学時代を通じて父親の経営する金物店の仕事を手伝いました。

マービン・J・アシュトン長老は生涯を通じて若い人々ために働く数多くの機会を持ち、それを楽しんでいました。教会幹部として召される以前にアシュトン長老は若い男性相互発達協会(現在の若い男性組織)で21年間責任を果たしました。このうち、10年間を中央管理会の一員として、11年間をその会長会の中で働きました。教会の青少年プログラムを携えて世界じゅうのユニットを回ったものです。

1993年5月、インスティテュートの学生たちを前にして、アシュトン長老は次のように語りました。「私は若い人々が大好きです。若人の皆さんから信頼を寄せられる友となれるよう、長年にわたって努めてきました。別にそれを誇示するつもりはありません。皆さんの友であり、擁護者でありたいと静かに考えているだけです。そして、皆さんに対し、心からの愛と、激励したい気持ちと、深い尊敬の念を抱いています。」(「ソルトレーク・タバナクルでのセントラルパレー・インスティテュートの学生たちへの説教」1993年5月16日)アシュトン長老を知る人々は、確かに彼がこの言葉どおりの人であることを知っています。

アシュトン長老はスポーツを愛していました。また、個人の体力の維持、若い人々との交流、さらには彼らの人格形成という点で、スポーツの価値を認めていました。YMMIAのフィールド競技会を指導していた時代には、若者たちの参加できる活動種目が著しく増えました。「だれもが体力作りをする必要があります。」アシュトン長老はそう説くことで知られており、自身もそのとおり実行しました。

青年時代に教会のバスケットボールで著しい成績を上げていたアシュトン長老は、イギリス諸島で専任宣教師として伝道していた当時、全英選手権で優勝した末日聖徒宣教師チームのキャプテンを務めていました。テニスでは、幼いころ兄のウェンデルとの間に始ま

った腕くらべが70年も続きました。アシュトン長老は、ときどき冗談めかしてこう漏らしていました。ノーマ・バーンストンと最初にデートした理由のひとつは、彼女の両親がテニスコートを持っていたからだ、と。アシュトン長老とバーンストン姉妹は、1940年にソルトレーク神殿で結婚しました。1951年には、教会全体で行なわれたテニスのダブルス選手権での優勝チームに属し、1954年には夫婦で混合ダブルス選手権に勝利を収め、1969年にはやはり夫婦で教会全体の競技会の決勝まで残りました。アシュトン長老は自身の体力作りのためにテニスとジョギングをずっと続けました。

さらに、アシュトン長老の生涯は、霊的な事柄と物質的な事柄、世俗的な仕事の管理と慈悲深い愛を必要としている人への対応との間に、みごとなバランスを保っていました。

アシュトン長老は、教会の内外においてあまねくその管理経営手腕のすばらしさで知られていました。アシュトン長老は教会の指導者訓練委員会の委員長、コーリレーション役員会および中央福祉活動委員会の役員を亡くなるまで務めました。さらに、教会教育管理会ならびに教会教育役員会に籍を置き、ブリガム・ヤング大学の理事も務めました。ブリガム・ヤング大学からは名誉人文学博士号を授与されています。また、ユタ大学を卒業したアシュトン長老は、同大学から傑出した卒業生に送られる特別賞と名誉法学博士号を授与されています。ユタ州の州立大学評議員として高等教育のためにも尽くしました。

教会幹部として召される以前のマービン・J・アシュトン長老は、みずから設立した製材会社の副社長として働き、1957年から1961年まではユタ州の州議会議員を務めました。さらに長年にわたって実業界で数々の要職に携わってきました。デゼレト出版社およびZCMI デパート組織の社長、教会が保有する不動産資本の管理を委託されているシオン証券会社の副社長、ファースト・セキュリティー・コーポレーション&ベネフィシャリー・デベロプメント・コーポレーションの取締役など

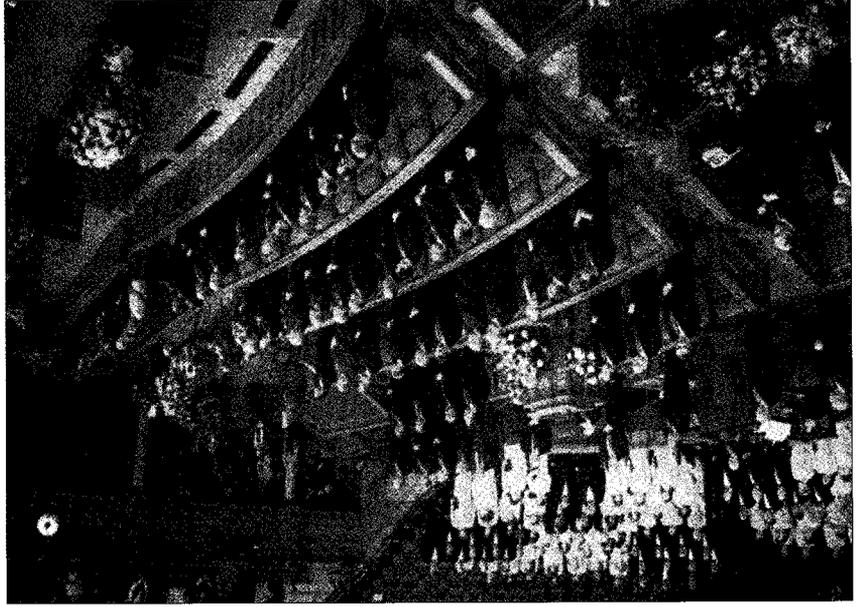
が挙げられます。

ビジネスマンとしてまた行政官としてのマービン・J・アシュトン長老の生活には霊的な価値観がしっかりと根を下ろし、必要を抱えた人々の援助に献身する姿がありました。たとえば州議会議員時代には、少年拘置所の改善運動の先頭に立ち、十二使徒補助の時代には、教会の統合社会事業計画(現教会社会福祉課)の初代運営委員長に就任しました。アシュトン長老は教会のこの部門を担当した期間、青少年のカウンセリング、里子の養育、受刑者の更生、養子縁組、インディアン学生への援助など、個人の福祉問題を扱うプログラムと取り組んでいます。長老は受刑者に手を差し伸べるために尽力しました。ユタ州立刑務所内の宗派を越えて使用できる新しい礼拝堂の建設もその成果のひとつです。

アシュトン長老が個人的に示す模範の影響力はきわめて強いものでした。ユタ州立刑務所のある若い受刑者は、アシュトン長老から示された個人的な愛にこたえて、生活を変え、ついには神殿結婚するまでになりました。かつて服役していた彼の言葉です。「主の使徒が私のような者に握手をしてくださると知ったとき、自分はきっと価値のある者なのだと思います。」

マービン・J・アシュトン長老はこう述べたことがあります。「ふさわしきとはどのようなものか理解していない人が、かなりたくさんいるようです。ふさわしきとは成長過程における努力の表われであり、完全への歩みは永遠に続く旅です。私たちは今は完全でなくても、ある種の特権を享受するだけのふさわしさを備えることができます。」(『ふさわしきについて』「聖徒の道」1989年7月号, p. 22)

別の総大会では次のように教えました。「神権を持つ若人の皆さん、神は私たちが勝利の栄光を手にするように望んでおられます。あらゆる敵に勝利を収めるように望んでおられるのです。固い信念と勇気を持って強く立たなければなりません。神は導いておられます。負ける理由はありません。」(『山のごとく強く立つ』「聖徒の道」1990年1月号, p. 39)



必要を抱えた人々を助けること、イエス・キリストにより悔い改めの希望を見いだすことについて、アシクトン長老は熟練者の風格をもって、ある総大会でこう教えました。「お互いに愛し合い、助け合うことが不可欠なので。……相手の長所を褒めれば、相手を強め成長させることができますが、必要以上に批判すれば、相手を弱め、恐れのお持ちを植えつけてしまいます。」(「かよわきひさを強うすべし」「聖徒の道」1992年1月号, pp. 78-79, 80)

また別の折には、こうも語りました。「私たちを幸福に導く吟味された真の規範に従わないならば、本人のみならず家族や友人をも苦しめ、ついには不幸を招くのです。……神から与えられた規範に従う人は、自分の弱点を認識し、前向きな姿勢でそれらを克服し、キリストの高みにまで昇ることができると約束されています。」(「あらゆるものに与えられた規範」1991年1月号, pp. 21, 22)

アシクトン長老は、人がどのようにみずからの成功を評価しようと、いかに大きな力の源は家族であると考えていました。アシクトン長老はときどきこのように言うていたそうです。「ノアとの結婚が私にとって最高の出来事でした。」アシクトン夫妻の間には、4人の子供—M・ジョン・フシエト、スチーブン・K・フシエト

アシクトン・ホードン、ジョン・フシエト、ウィリアム・フシエト—と18人の孫がいます。アシクトン長老は大学を卒業すると、イギリス諸島に伝道に召され、そこで自分自身について、また人との接し方について、生涯にわたって役立つ教訓を得ました。当時の伝道部長であったヒュー・B・フライング長老によれば、アシクトン長老は「常に自分のいるべき場所、あるべき姿を心得ている」(「エンサイヴ」1972年3月号, p. 20) 宣教師だったといえます。そして伝道を終える前に、当時教会がイギリスで発行していた「ミレニアスター」の編集副主幹に指名されました。後年、フライング長老とアシクトン長老は十二使徒定員会で一緒に働くようになりました。アシクトン長老は専任宣教師時代に、人々と協力するときに必要な愛と忍耐の価値について学びましたが、ずっと後になって、その時の体験談を著書のひとつで紹介しています。アシクトン長老は深刻な問題を抱えた同僚と一緒に働くようになって2日目、この同僚がアシクトン長老を殴りつけたのです。それをアシクトン長老がそのまま報告すれば、同僚は懲戒を受けていたでしょう。しかし、アシクトン長老はそうせず、この機会を生かして、同僚が変わり、成功できるように助けたのでし

た。(「アービン・J・フシクトン著「心のものさし」 pp. 80-82参照)

アシクトン長老はアサー王の話をよく引き合いに出しました。王妃ギニビアがラウンスロットに向かつて、業績を誇るのではなく、行ないによってさかしさを示しなさい、と忠告する話です。アシクトン長老はこう言いました。「今の時代でも、自分の輝かしい過去を披露したり、実績を吹聴して人々に聞かせるより、よい行ないを世の人々に見てもらおう方がどれだけ効果があるでしょう。」(「心のものさし」 p. 51)

アシクトン長老自身がこの原則の美談者でした。アシクトン長老はみずからの働きに對したれの注意も引くことしませんでした。その働きから生じる効果のすばらしさは人々の目に明らかでした。スペンサー・W・キンボーム大管長はある折に、アシクトン長老についてこう記しました。「この気高い男性、すばらしい使徒、友の知恵によって、老若を問わず、おおぜいの人々が祝福を受けてきました。アシクトン長老は、私の知る限り、常に人々のために仕えてきました。アシクトン長老の生涯は文字どおり、人々が正しい目的地を見だし、そこにたどり着けるよう助けることに捧げられています。アシクトン長老は忍耐強い励ましと静かな模範によって教えたり、成功できるように助けたのでし

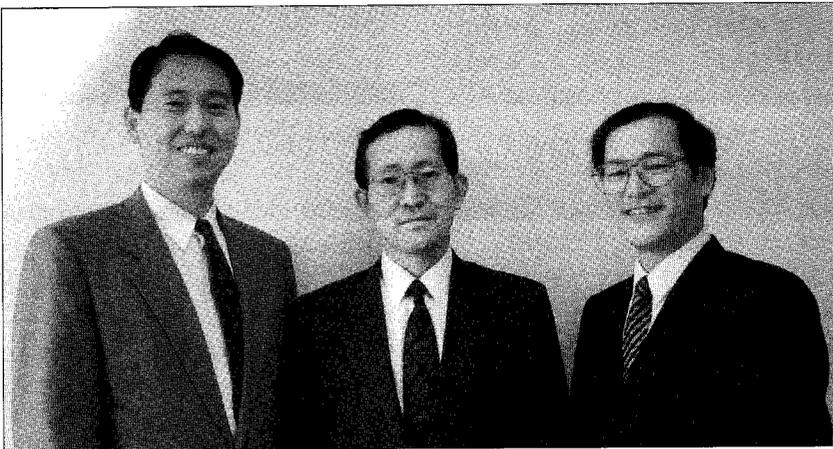
アシクトン著「あなたはどこに向かっているのです。」(「アービン・J・フシクトン著」序文, p. ix)

アシクトン長老はかつて、教会の指導者の集いの中で次のように教えました。「神の小羊、その子供たちを養う羊飼いになるのはなんと名誉なことでしょうか。凍えている者を温め、迷っている者を集め、空腹の者に食を与え、手を差し伸べて、よき羊飼いともしにいるときに感じられる安らぎと慰めをすべての人々に与えることは、なんと栄えある機会であり、心を満ち足らせることでしょうか。」(地区代表セミナーの説教, 1988年4月1日)

この言葉は愛と奉仕に満ちたアシクトン長老の生涯を、紛れもなく言い当てています。□

再組織された 大阪堺ステークス部長会

去る1月16日、アジア北地域会長会会長メリル・J・ベイトマン長老管理の下に開催された大阪堺ステークス部大会で、1986年9月よりステークス部長の責任を果たしてきた小松忠兄弟が解任され、新たに南本邦雄兄弟が召された。第一副ステークス部長には、杉本恵洋兄弟(写真左)が、第二副ステークス部長には、大迫信明兄弟(写真右)が召され、その任に当たることになる。



『『みたま』は汝らの心の中に在り』

大阪堺ステークス部長 南本邦雄

1960年代後半、大学紛争の中にあつて、心はいつも揺れ動いていました。平和とは何かなど、深く考えさせられる時期でした。

1969年9月末に、大学の先輩を訪れ、

ふたりでしたたか飲み、苦しい一夜を過ごした翌日のことです。大学の帰り道、自分のいたらなき、汚れたさまを深く悔い、今の生活を何とかしたいと思ひ、もう決して酒は飲ままいと堅く

決心しながら歩いていました。

その時、ふたりのアメリカ人の青年が、真正面から私に近づいて来て、「おもしろい映画があるのですが見る時間はありますか」と声をかけてくれました。時間にゆとりのあつた私は、素直に招きに応じて、ふたりに従って行き、神戸支部の一室で、ジョセフ・スミス最初の示現やモロナイのこと、モルモン経についてなどのスライドを見せてもらいました。

私は、特にモルモン経に興味を覚え、ぜひ勉強させてほしいと私から長老に頼みました。それ以降、2、3日おきに教会に通い福音を学ぶようになり、次第に張りのある生活ができるようになりました。

初めて日曜学校に参加させていただいた時のことは、今でもよく覚えています。ひとりの同年輩の青年がにこにこして迎えてくださり、玄関に入ってから私が帰るまで、集会の間ずっとそばにいて世話をしてくださいました。その帰りには、何とも言えない温かさに体が包まれたのを覚えています。

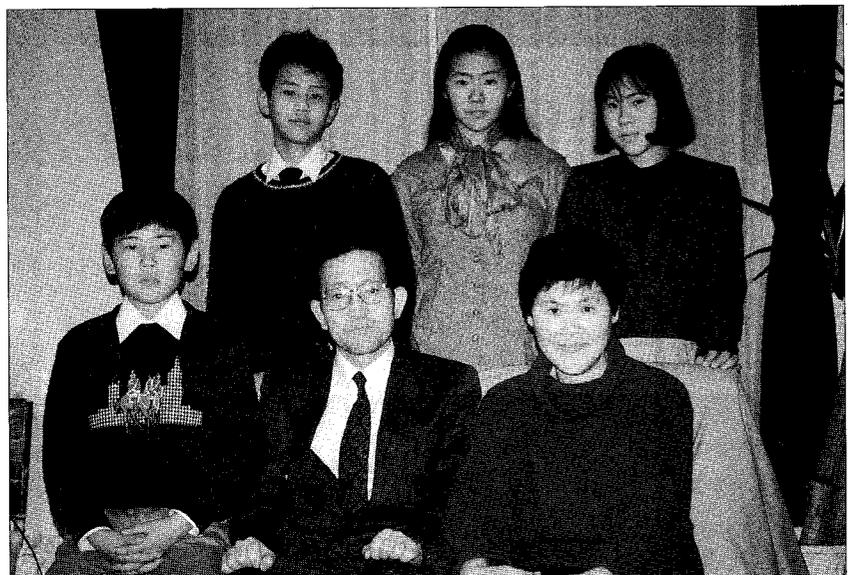
ある朝たばこを1箱買い、1本吸っていつものように宣教師の話の聞きに教会へ行ったところ、「知恵の言葉」のレッスンでした。神様の教えを受け入れようと思っていた私は、主の助けがあつて、直ちにたばこを断つことができました。残り19本は宣教師に預け処分してもらい、それ以降は1本も吸っていません。

しかし自分のような汚れた者、罪深い者の祈りなど、神様はお聞きになら

南本邦雄ステークス部長の紹介

1948年兵庫県尼崎市生まれ。21歳でバプテスマを受け、1971年から1973年まで日本西部伝道部で専任宣教師として働く。神戸大学教育学部卒。1974年から現在に至るまで、中学校で教鞭を執る。これまで、副ステークス部長、副伝道部長、ステークス部伝道部長、高等評議員、監督、副支部長を歴任している。

南本邦雄ステークス部長ご家族



ないと思っていた私は、なかなか祈ることができませんでした。

11月9日、ふたりの長老は私に特別なレッスンをし、祈りの力、神権の力について証し、そのうえ、私の頭に手を置いて、祝福してくれました。その時、私は生まれて初めて声を出して祈ることができました。心から長老たちに感謝しています。

11月23日にバプテスマの水に入り、体じゅうに温かいものを感じました。何にでも感謝したい気持ちでいっぱいになり、「……に感謝します」としきりに言っていたのを思い出します。

やがて神戸支部から、尼崎支部へ移りましたが、信仰と従順の模範を沼野支部長から教えられました。また伝道中、渡辺謙伝道部長からは、何度も霊的に開眼され、今でも忘れることができません。

伝道中のある日、監督長老だけを集めた集会在佐世保で開催されました。朝早くから集会は始まり、その集会を終えた私が熊本駅に着いた時は、もう夜もだいぶ遅くなっていました。熊本第2支部までの人通りの少ない坂道を自転車で走っていると、ペダルが急に軽くなり、温かいもので包まれて、何かがあるという特別な感じがしました。

「そは、われ汝らの前に先立ちて行くべければなり。われは汝らの右に在り、また左に在らん。わが『みたま』は汝らの心の中に在り、またわが天使らは汝らを囲みて懐き支えん。」(教義と聖約84:88)私は、この聖句が真実であると身をもって体験し、証することができます。

また、前ステーク部長であられた小松兄弟の下で働いた3年9カ月間も、私にとって今までの教会生活の中で最も楽しい時期でした。第二副ステーク部長の溝口兄弟たちと、集会の終わるたびに抱き合い、愛を表わす新しい習慣を教えていただいたからです。常に愛と一致がありました。すばらしい経験でした。

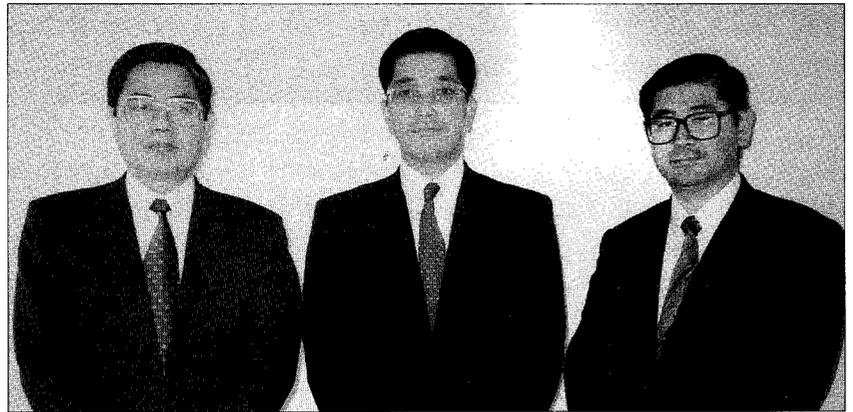
今にして思えば、人生の至る所で主のみ手があり、これまでの生涯、主の厚い恵みを受けてきたことを感じ、父なる神様とイエス・キリスト様に感謝する思いでいっぱいです。

イエス・キリストが罪の贖い主であり、全人類の救い主であることを心から証いたします。また、末日聖徒イエス・キリスト教会が真実の回復された

教会であり、エズラ・タフト・ベンソン大管長が神の予言者であると証できます。(みなみもと・くにお)

再組織された 東京ステーク部長会

昨年12月12日、アジア北地域会長会会長メルル・J・ペイトマン長老管理の下に開催された東京ステーク部大会で、1987年6月よりステーク部長の責任を果たしてきた内山雅巨兄弟が解任され、新たに鈴木和夫兄弟が召された。第一副ステーク部長には、窪田直隆兄弟(写真左)が、第二副ステーク部長には、柿木良三兄弟(写真右)が召され、その任に当たることになる。



長男の死を境として

東京ステーク部長 鈴木和夫

私が初めてキリスト教の教会に行ったのは高校1年の後半でした。土曜日の午後、友人に誘われて行った所は、屋根の上に十字架のついているカトリック教会でした。そこで私は、十字架に掛けられ手首に釘のあるイエス・キリストのスライドを見ました。ドイツ人の神父さんは私に、イエスの手のひらが裂けて、手首に打ち直されたと話しました。その絵の印象はしばらく私の脳裏に焼き付いて離れず、それからは毎週教会へ行くようになりました。そして高校3年の12月25日に洗礼を受けたのです。

1967年12月10日の安息日の朝、私が20歳の時のことです。私は呼吸困難で意識不明になり、救急車で病院に運ば

れました。父が急死して9日後のことです。間もなく意識が戻り、助かったと思えました。見渡すと周りは重病の方ばかりの部屋でした。心臓、肝臓、胃の悪い方たちでした。私は自然気胸と診断されましたが2、3日でかなり元気になりました。クリスマスの夜、心臓病の方の奥さんがケーキを買ってきてくれました。4つのベットの少し移動してケーキを真ん中に置き、ささやかなパーティーをしました。どの顔もやさしく、またうれしそうでした。3週間ほどの入院でしたが、その間にふたりの方が亡くなり、この時ほど「死」について考えたことはありませんでした。年が明け成人式を迎える直前のことでした。

鈴木和夫ステーキ部長ご家族と伝道中の芽衣姉妹(右上)



鈴木和夫ステーキ部長の紹介

1947年東京都品川区生まれ。明治学院大学社会学部中退。1971年、加藤美和子姉妹と結婚し、1978年、家族でバプテスマを受ける。現在2人の子供がいる。東京ステーキ部ひばりヶ丘ワード部所属。会社役員。これまで、高等評議員、監督、副監督、長老定員会会長を歴任している。

妻とは教会の友人と行ったスキー場で知り合い、1971年に結婚しました。目黒からひばりヶ丘に移って来たのは1975年のことです。その時はまだ、すぐ近くに末日聖徒イエス・キリスト教会があることなどまったく知りませんでした。

質素な身なりをした宣教師の訪問を受けたのは、とてもよく晴れた日で車を洗っている時でした。澄んだ熱いまなざしで、彼らは真理を伝えるために日本へ伝道に来ていることを告げました。私は手を止めふたりを家に招き入れ、妻と話を聞きました。熱いまなざしをしたシェリーという宣教師の靴下は、季節外れの厚い物で穴が開いていました。靴もほとんど形が崩れていました。1時間ぐらひの話はとても新鮮でした。話の途中で何度かぞくぞくするのを感じていました。そして次の訪問を受ける約束をしていました。2年間自費で伝道に来ていることを聞き、帰る時に少しのお金を包んで渡そうと

しましたが、き然と断わられてしまいました。

福音を学び教会にも行き始めましたが、私たち夫婦がそろってバプテスマを受けるようになるまでにはかなりの時間が必要でした。辛抱強く宣教師や会員のかたがたが訪問してくれました。私はカトリック教会で洗礼の後、ほかの儀式も受けていましたので、バプテスマにはかなり抵抗がありました。もともと私は頑固な方で、お世話になった神父さんや親しく語り合った仲間のことを裏切るような思いもありました。でも2年以上福音を学んでいるうちに、知恵の言葉は自然に生活に入り込み、否定できない真理を知るようになっていました。そして新しい人たちとのよりよい関係も育ってきておりました。新たな信仰が心に根を付け始めたころには、頑固な心は、必然的に素直な心に変化してきました。

そしてやっと、1978年5月28日、東京ステーキ部センターでバプテスマを受けました。バプテスマを受けた後、しばらくの間、体じゅうが温かくなったことをはっきり覚えています。決心するまではとても慎重だった妻は、改宗してからは歩みが速くなりました。それに引き替え私は会社のラグビー部に所属していて、シーズン中はほとんど教会へ行けません。経済的には苦しい時期でしたが、妻はいつも変わらず穏やかに子供たちを育ててくれました。

1981年12月、私たち家族は悲しく苦しい経験をしなければなりません。20日は初等協会のクリスマス会があった日でした。私は仕事の帰りに家族と待ち合わせをして、久しぶりに子供たちのための買い物をしました。途中で当時6歳だった長男の亮平が気持ちが悪くなり、急いで家に帰りました。それまでの経験から、風邪を引いたのだらうと思い、温かくして寝かせました。

翌日は私だけが教会へ行きました。家に帰って間もなく、亮平が引き付けを起こしました。救急車が駆けつけ病院へ向かう途中、同乗した私は何度も「亮君頑張れ」と励ましました。病院に着くと、当直の先生はここでは手の施しようがないと言いました。

また救急車に乗り、ほかの病院へ移動することになりました。次の病院に着いた時には、呼吸が弱くなっていました。若い先生は皮でできた、まりのような呼吸器の先を子供の口にあてがい一定の間隔で押すと、子供の胸は不自然にふくらみました。しかしこの病院にも治療に必要な設備がないので、先生はほかの病院の手配をするために、急いで部屋を出て行きました。日曜日での病院もなかなか連絡が取れないようでした。やっと都内の大学病院に移ることになりましたが、先生はその病院に着くまで命がもつかわからないと言いました。再び救急車に乗りました。先生は呼吸器を絶えず押しながら、途中何度か車を止めるように指示し聴診器で心音を確認しました。

病院に着くと直ちに集中治療室に入れられ、人工呼吸器が取り付けられました。間もなく女の先生が来て急性脳症という病名を告げ、「残念ながら助かる見込みはありません。万が一助かっても脳に障害が残るでしょう」と言いました。人工呼吸器の「シューポン……シューポン……」という音が止まったのは1月11日でした。闘いは終わり、亮平は神様のみもとへ向かいました。終始私たちのために教会の多くの人たちが祈り励まし、無言で慰め助けてくれたことは決して忘れることができません。

私はこの突然の出来事を機に、自分

がもっと変わらなければならないことを痛感いたしました。天父がどのような思いで愛する御子を遣わされ、贖いのみ業を見守られたか、わずかながら理解することができたからです。そして家族と一緒に天父のみもとで再び亮

平と会うために悔い改め、必要な備えのすべてを行なおうと決心しました。

私たちのバプテスマから15年たった昨年の11月に、長女芽衣は伝道の召しを受けることができました。神様の愛と導きとに深い感謝を捧げずにはいら

れません。思い起こせば、私たちを見つけてくれた宣教師のあの澄んだまなざしは、愛する御子イエス・キリストの目に思えてなりません。(すずき・かずお)

ロシアの地に広がる福音

——不安定な経済状況の中で——

ロシアで伝道中の水野博朗長老からのお便りを紹介します。彼は昨年3月、日本人で初めて旧ソ連圏に招かれた専任宣教師です。

ウクライナ・キエフ伝道部専任宣教師
水野博朗

キエフの町に赴任して8カ月、11月半ばには氷点下15度にもなりましたが、今は雪が降ったおかげで多少温かくなっています。

MTC(アメリカ合衆国宣教師訓練センター)を出て、ここキエフに到着したのは1993年5月18日。大変緑の多い町で、また会員たちの温かさと強さに感動したのを覚えています。キエフにはすでに1,000人以上の会員がおり、12の支部で3つの地方部を組織しています。私がキエフに残ることになったその後すぐにウクライナ・ドネーツク伝道部との分割があり、ともにMTC

で学んだ宣教師のうち3人がそちらへ行きました。MTCの時の同僚は今オデッサという町で、またほかの長老や姉妹たちもキエフやまたシンフェローポリ、白ロシアのミンスクなどで働いています。

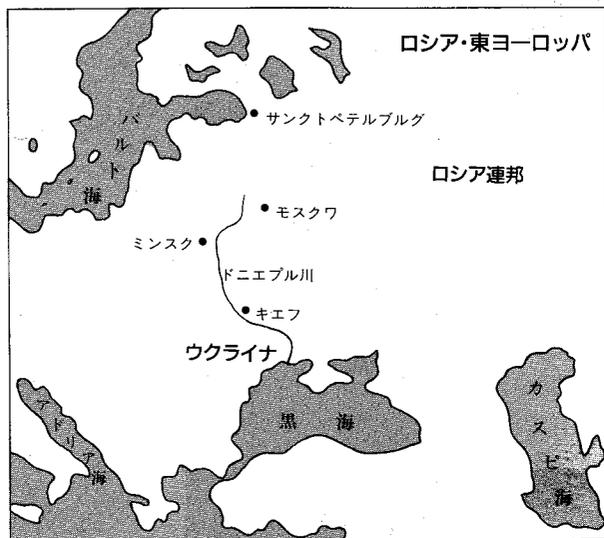
MTCでは英語の力不足に、ここキエフではロシア語の力不足に悩み、生活面でも日本と比べると信じられないほど不便で苦勞することも多いですが、会員たちの力強い信仰と同僚宣教師たちの助け、そして何よりみたまを通して与えられる主の助けを通して、多くの祝福を受け支えられてきました。

アメリカからキエフへ向かう飛行機の中で教義と聖約84章80節を読み、最善を尽くすなら絶対に主が守ってくださるという信仰を持ってこちらに来ました。もう日本語を話さなくなってしまうと恐ろしく感じます。言葉の面でも、もちろん完全ではありませんが必要な助けを得られていると感じます。みたまが

助けてくれるとき、言葉のよしあしは関係なく、この福音が真実であるということを中心に伝えることができます。「謙遜さ」と「勤勉さ」が伝道を成功させると知りました。私もこの特質を身につけられるよう努力しています。

私がキエフに来て最初の週にすばらしい家族のバプテスマがありました。今は凍っているドニエプル川で福音を受け入れた家族のバプテスマを見るのは大きな喜びでした。何より、バプテスマの後に新会員が活発に教会に集い、召しや神権を受け、1年後に神殿に参入するのを見ることは大きな祝福です。

経済状況が非常に悪く、毎日のようにインフレーションが続くウクライナでは会員たちの犠牲は大変なものです。什分の一を払い、召しを果たし、伝道に励む会員たちの姿を見ると、自分も最善を尽くさなければと感じます。月収平均は7、8ドルでしょうか。そんな中で神殿参入のためのお金をため、



ドニエプル川でのバプテスマ会。水野長老は左端



ドイツのフライベルク神殿にバスで片道36時間もかけて参入し、断食^{あかしかい}証会で涙を流して神殿の祝福を証する会員たちの姿には心を打たれます。日本では格安の「聖徒の道」(ロシア語版「リアホナ」)もこちらではとても手に入らず、会員たちは回し読みをしています。まだ、教義と聖約のロシア語版が出ていないため、彼らはモルモン経と翻訳済みのわずかな資料で信仰を使って固く立っています。ここでは医療事情も極端に悪く、宣教師は病気をするとモスクワかオーストリアのウィーンに送られます。扶助協会では集められるだけの薬を集め、必要な会員たちに渡しています。ドイツの神殿参入は薬を得るためのよい機会です。先日5歳の会員の子供が、手術のため入院した時も病院にはあまり薬がないので、会員たちが必要な薬を持っていくという状況でした。

社会主義から離れて自由になったとはいえ、資本主義経済に移行するのは大変なことのようです。不安定な新しい経済状態の中で人々は生きるのに必死です。今年の冬は電力が賄えないため、家の暖房は例年の30パーセントしかなく、テレビも週末を除き夜の6時から12時まで。そんな中で会員たちは聖歌隊を組織し、最近始まったセミナー、インスティテュートで学び、信仰をはぐくんでいます。すでにこの町から20人以上の改宗者が専任宣教師として、ロシア・サマラ伝道部やモスクワ・サントペテルブルグ伝道部で活

躍しています。

伝道活動の方ですが、宗教が自由になるとともにあらゆる宗教が一気に旧ソ連に流れ込み、一種流行のようなきらいすらありましたが、徐々に人々も慣れてきて、あれもこれもと受け入れることはなくなり、以前に比べると多少むずかしくなっているようです。

伝道を目的としたビザの発行も次第にむずかしくなっており、旧ソ連圏に召された宣教師の多くがMTCで任地変更を余儀なくされ、アメリカ合衆国内の伝道部やスペイン語圏に召された宣教師もいます。結局、旧ソ連圏に召された宣教師の半数はほかの任地へ変更されたそうです。私たちのグループは、キエフへひとりも欠けずに入国できた最後のグループでした。今の同僚はMTCを終えてもビザが下りず、カリフォルニアで約2カ月伝道してからここへ来ました。ロシア正教会の力が強く、外国人宣教師がここで伝道できなくなる可能性もあるので、ステーク宣教師の育成が進んでいます。彼らは私たちとよく働き、何人かは専任宣教師とともに1日の大半を使い働いています。ここでの2番目の同僚はチェコ出身でしたが、彼が改宗した時、宣教師の伝道は許可されておらず、会員たちが仕事の後、自分たちで伝道したそうです。

また伝道部長の働きは大変なものです。ビッグルフ伝道部長と姉妹の愛は大変深く、いつも彼が主のみ手に使われて私たちを導いてくださっていると強く感じます。また夫婦宣教師の働きも偉大です。彼らはここでは、神権指導者であり翻訳者であり宣教師です。言葉の面では苦勞しているようですが、多くの会員や求道者を助けています。

多くの会員、求道者、同僚宣教師の模範、そして私を支えてくれる家族の愛、友人、日本の教会員の皆さんに心から感謝しています。そして何より、いつもいつも私を守り、導き、助け、支えてくださる主の恵みと導きに心から感謝しています。与えられたこの機会をじゅうぶんに生かして、多くの人々とこの永遠の真理を分かち合いたいです。(みずの・ひろあき 1993年12月27日付)

両親の改宗を通して 「主の時」を 感じました

東京南ステーク部渋谷ワード部
前田伸子

1992年、入退院や手術を繰り返していた母が、私たちが夏休みに帰省した際、自分から「明日、教会に行ってみようかな」と言い出しました。20年余り祈り続けてきて、初めての言葉でした。それから2カ月後、数々の主の導きと宣教師や兄弟姉妹たちの助けがあって、両親はそろってバプテスマを受けることができました。両親の改宗を通して、私たち家族も多くの祝福を受けました。また週に1度の神殿での奉仕の機会もあり、それを助けてくれる子供たちとともに幸せな日々を過ごしていました。

そんなある日、元来、虫歯のない私が歯に痛みを感じました。普通なら忙しさに紛れて通院することなど考えられない時期だったのですが、思い切って近所の歯科医院を訪ねました。結局、虫歯でも何でもなかったのですが、その時先生から別の指摘を受け、口腔外科で診察を受けるよう紹介状をいただきました。当時私は、長男の学校ではPTAの役員を、次男の幼稚園では幹事を務め、折々の行事のために忙しい毎日を過ごしていました。また、次男が目の手術を受けることなどもあり、私は紹介状を手元に置き一段落するのを待っていました。

やっと時間が取れて2月に大学病院で検査を受けましたが、その時には「多分、だいじょうぶでしょう。何かあったら、すぐに電話が行きますから」という具合でした。安心のための検査と自分に言い聞かせていましたが、検査後の痛みが思いのほかひどかったのと、何か導かれるのを感じ、翌日、神殿に奉仕に行った時、生まれて初め

家族の証

て自分の名前を祈りの中に入れてきました。

1週間後、抜糸のため通院した時には「結果はしばらくは出ないけれどだいじょうぶでしょう」ということで、次回の予約をし安心して帰りました。そして仙台の父から2月の神権会でメルキゼデク神権を受けることになったという喜びの電話もあり、結果のことを忘れかけていました。

検査から10日ほどして、病院からの呼び出しを受けました。私はひとりで病院へ行き、先生方から説明を受けました。私も医療に従事していましたので、どの程度の進行状況にあるのか隠さず詳しく説明してほしい旨を伝えると、最初は言葉を選んでいて先生方も詳しく話してくださいました。そして今回手術ができなければ保証はできないと言われ、緊急に手術をすることになりました。

説明を聞きながら先生方の声がだんだん遠く聞こえなくなってしまうこともありましたが、しばらくして病院から主人のオフィスに電話をかける時には、自分の置かれている現状をそれまでの信仰生活を通して受けてきた喜びや祝福とともに、すべてを受け止められるようになっていました。主人が先

生方の説明を受けた時にも同様だったようです。それからは入院までわずかな日々を、手術のための検査に通院したり、残る子供たちのもろもろのことを頭にいっぱい抱えながら、何よりも自分自身を励ますことで精いっぱいでした。私は入院することが決まって、子供たちにもがんであることを伝えました。手術後はどのような生活ができるのか今ははっきり言ってあげられないことも伝えていたので、その小さな胸はどれほど不安でいっぱいだったことでしょうか……。子供たちにとっても大変つらい経験だったと思います。

そんな時、当時4年生の長男が学校で前歯の永久歯を折るけがをして戻ってきました。入院2日前でしたので、応急処置を歯科医院でしていただき、あとの治療は私が退院をしてから、ということになりました。その時先生からは「子供の成長から言って、今は仮の治療しかできないので高校生になったら完全に治しましょう」と言われ、さすがに「5年後、この子の歯を治してあげられるまで生きていられるかしら……」という思いがよぎりショックでした。

長男はそれ以上に小さな胸を痛めていました。けがはあくまで自分の過失と言い切って、できるだけ私に心配をかけないようにしていたのでしよう。先生が書いてくださった連絡帳も見せず、涙をいっぱいにして「お母さんからもらった大切な歯を折ってしまって、ごめんね」と繰り返していました。



前田ご家族

その日は長男の10歳の誕生日でしたが、ケーキを焼いてあげるゆとりもありませんでした。

翌日、入院を明日に控えた夜に事故の元となった相手方のお母様がおわびにいらして事情がよくわかりました。子供たちにはお友達と何か問題があったら、その子のために一緒に祈り、その問題をよいきっかけにしてさらに親しいお友達になれるようにと常々言ってきました。その時にも長男は、おわびにいらしたお母様に逆に慰めの言葉をかけていました。そのやさしさにも、胸がいっぱいになりました。

入院前には、主人から、そして手術の前日にはメルキゼデク神権を受けたばかりの父から、病室で祝福を受けることができました。両親の改宗は私にとっても劇的なものでしたが、今回の経験を通して、それらには私たちには計り知れない「主の時」があることも改めて感じました。手術が決まった時、「あと半年早かったら」と病院で言われましたが、もし半年前に手術をしていたら、両親の改宗も父からの祝福もわかりませんでした。改宗後、熱心に福音を学んでいた両親は、私の病気をとても冷静に受け止めてくれて、入院中、母が子供たちとともに祈りの生活をしていてくれるという安心は私にとって大きな支えでした。

愛する家族や兄弟姉妹の断食と祈りにより、手術は成功しました。摘出が上あごのどのの方まで及んだのは、その病院でもまれだったようで、手術後のリハビリが大きなハードルとなりました。口に含んだうがい薬がすぐに鼻から出てしまった時のショック、開かない口を開ける訓練、食事はプリンひとつを2時間もかかって……という具合でしたが、次男の卒園式には何とか間に合わせて退院することができました。

体力も回復せず、痛みと苦痛、食事はもちろん、つばを飲み込むことも大変な生活でしたので、退院後2、3日おきに通院する毎日は、さすがにこたえました。その時「聖徒の道」1993年4月号で、同じ病気で亡くなった姉妹の記事を読みました。口腔内のがんは全体の1、2パーセントで、そのほと

んどが舌がんと言われていますが、そんな中で、口腔外科で同様の手術を受けた姉妹の記事は大変な驚きでした。

手術後、私は心から生きた証し人になりたいと思いました。聞き取りにくいとは思いましたが、努めて証会に立ちました。そしていつも「子供たちのために、せめて次男がバプテスマを受けるまで、せめて伝道に出る時まで、現世にとどめておいてください」と祈っていました。母親としての最低限の務めであると思っていたのです。

ところがある証会で、子供たちがふたりそろって証をする姿を見て、私は改めて大切なことを確認しました。それは私が母親としてできることがあるとすれば、子供たちが証を持てるよう一人一人を導いてあげること、それが何にも増して大切だということです。頭ではわかっていたつもりでしたが、福音の中をまっすぐに歩んでいる子供たちの姿を見て、天のお父様はすべてを祝福し、与えてくださっているのを知りました。現世での長らえよりも、どんなに短い時間でも福音を知り平安に生活できる喜びの大きいことを感じます。

今年の8月には、神殿でオルガニストとして奉仕させていただけるようになりました。最近も続けてエンゲウメントを受けられるまでに体力も回復してきました。昨年は先祖の身代わりの儀式を受け、10月には両親とともに神殿に参入し結び固めを受けることもできました。

今回の手術を通して、主の愛をより強く感じ、その祝福を豊かにいただきました。話すことは少し不自由になりましたが、それまでも増して証をしたいという心に駆り立てられます。歌うことはできなくなりましたが、心の中で思いっきり賛美歌を歌っています。手術の影響で聞こえなくなった右耳も、最近耳鼻科の手術を受け、よく聞こえるようになり、ピアノを弾いても違和感がなくなりました。体力も回復してきましたので、好きな車を運転しての通院もだいふ楽になりました。

たくさんの祝福をいただき、私は本当に幸せに思います。福音を知ったおかげで、人生の目的を見失うことなく

平安に生活できること、どんなときであっても、それができることを証します。機会あるごとに、その証を多くの人々に分かち合えたらと思います。そして、ひとりでも多くの人が主の愛に包まれ、現世での生涯を平安に過ごせるようにと願います。(まえだ・のぶこ)

家庭の中に愛あらば、 見るものすべて 美しく

仙台ステークス部長町ワード部
沼田キン

私が初めて教会に出席したのは1992年8月初めのことです。東京から帰ってきた娘家族と一緒に教会に集って祈り、賛美歌を歌いましたが、「家庭の中に愛あらば見るものすべて美しく」というその歌詞に胸が打たれ涙が流れました。本当に愛があればどんなことでも乗り越え、広い心で相手を赦すことができるようなそんな気がしました。結婚して40年いろいろなことがありました。次々に追い打ちをかけてくる病魔と闘い、精神的に耐えられないときは死のうと思ったことも何度もありました。

神様はどうしてこんなに私に試練を与えるの、と娘に話し電話で泣いたこともあります。こんな私をきょうまで支えてくれたのは娘です。20年前バプテスマを受けたいという娘に涙を流して反対した覚えがあります。今思うとなんと愚かな親だと情けなく思います。娘ふたりがお世話になっている教会に行った時、多くの兄弟姉妹が温かく迎えてくださり、すばらしい皆さんに巡り会うことができ本当にうれしく思いました。

娘家族が東京へ戻り、ひとりで教会に行った日、姉妹宣教師の方に声をかけられて福音を勉強し始めました。暗い心にほのかな明かりが見えるような、そんな幸せな気持ちになりました。

お酒を飲んでいる夫のそばで福音の

原則や学習ガイドを声に出して読み、聞いてもらう日が続ききました。何日か過ぎて今度は夫の休日を選び、宣教師の方に訪問していただいて一緒に福音を学びました。結婚して以来、夫の前で声を出して本を読むことなどありませんでした。今思うと神様の導きがあったことを感じます。ふたりの娘がそれぞれ家庭を持ち、夫とふたりだけになった私にはつらい日の方が多く、お互いに話し合えば傷つき無言で過ごす日もたびたびでしたが、福音を学ぶことで心がとても平安になり満たされた日が続ききました。

しばらくした9月6日に夫が断食をして初めて教会に出席してくれました。夕食の時、天のお父様に祈り、これから酒も飲みません、家族の嫌がることもしません、と祈る姿を見て胸がいっぱいでした。夫が自分から教会に行き、私たちは10月18日にバプテスマと一緒に受けることができました。改宗してから別人のようにいつも謙虚に接してくれる夫に、素直な気持ちで心から愛する気持ちになれました。私たちは神様のあふれる愛に包まれ、たくさんの祝福をいただき幸せをかみしめています。神様はこの幸せをつかむことができるように、私をきょうまで導いてくださったことに心から感謝の気持ちでいっぱいです。

11月の仙台ステークス大会^{あかし}をさせていただく大きな祝福を得ました。生まれて初めてたくさんのかたがたの前で自分の生き方を恥じることなく神様のみたまを受けながらお話しすることができました。この祝福を分かち合いたいと東京から娘家族が来てくれました。そして特別の計らいで娘も証をさせていただく祝福を得て、母娘ともに感激いたしました。

娘が16年前に私たちに手紙で伝えてくれたこの福音のすばらしさを改めて理解することができました。この世だけでなく永遠に結ばれる家族となり、幸せになれるようにと、この日の来るのをどんなにか願い、心を尽くし思いを尽くして私たちを助けてくれたことでしょう。孫たちからも福音を学ぶことがたくさんありました。

そんな幸せの日々に思いがけなく娘

が、がんの手術をすると電話がありました。「せめて子供が大きくなるまで生きていたいし、育てる義務があるからどんな手術でも受けて」と言う娘に、込み上げてくる涙で返事ができず、「お母さん聞いているの」という娘のき然とした声に娘の信仰の強さを感じました。神様は私たちの信仰を強めるために試されているようにも感じました。娘が「病気は祝福ではないけど、たくさんの祝福を受けることができて感謝しているよ」と言った時、神様の深い愛を感じました。病気との闘いは一生続くと思いますが明るく振る舞う娘に幸あれと祈っています。

私たちは、昨年10月30日に東京神殿で夫婦の結び固めと親子の結び固めの儀式を受けることができました。聖なる清き宮居でこの世だけでなく永遠の夫婦として手を握り合い、ふたりの愛を確かめ合うことができて感動しました。ユタ州プロボに住んでいる娘家族とも一日も早く親子の結び固めができるように、そして家族がひとつになって天のお父様のみもとへ帰ることができますように祈っています。

きょうまで導いてくださった宣教師の皆さん、いつも温かく励ましてくださったたくさんの兄弟姉妹の皆さんに心から感謝申し上げます。この教会が真実の教会であることを心から証します。(ぬまた・きん ワード部扶助協会書記補助)



永遠にわたる幸せを プレゼントしてくれた 娘たち

仙台ステークス部長町ワード部
沼田文雄

— 昨年の8月30日、初めてひとりで教会へ行く妻を車で送った時のことです。教会へ入って行く妻の姿がとてもかわいそうに見えたのです。「ひとりで教会の中へ入るのは心細いだろう」と妻の心境を思ったせいかもしれませんが、ちょうどその時、夫婦仲がすっかりしていなかったことへの反省もあって心が痛みました。

教会から妻が帰るにはだいぶ時間があるので、私はいったん家へ戻りました。夏休みで来ていた娘家族が帰った後で、家の中はシーンと静まりかえっています。所在なくテーブルの前に座った時、いつもは読むまいと思っていたモルモン経が置いてあるのに気がつきました。娘家族の手前もあって平静さを装っていた私たちですが、その数日前から口を利けばお互いに批判し合うことから、口も利かない状態に陥っておりました。後で思えば、主はそれらすべてをご存知であったように思えたりなりません。自分から折れることが嫌いで何かといえれば酒で気を紛らす私でしたが、妻を迎えに行くこともあって酒は飲みません。

私はしかたなく抵抗を感じながらもモルモン経を読み始めました。読み進むといつしか、聖らかなで威厳に満ちた内容に引き込まれ、次第に自分の罪を思い起こす心になっていくのがわかりました。そして読むほどに神のみ言葉の重みが私の心を打ち、罪を犯してきた自

沼田文雄・キンご夫妻

分が白日の下にさらされるような恐れと、悔いる心が重なり合い、だんだん悲しくなり涙がとめどなく流れ始めた時、この聖典こそ真実のみ教えであることを確信したのです。

生計のためにはすべて仕事が優先するという詭弁を弄して妻を欺き、家庭を顧みないで妻を困らせることばかりしていた私は、できることならこれまでの生活を改め、妻を大切にしようという心になっていました。神様は家族と心を隔ててきた私に、罪を思い悔い改める機会を与えられ、20年以上も親の改宗を祈り続けてくれた娘を祝福してくださいました。

私は訪れてくださった3人の姉妹宣教師とふたりの長老宣教師から福音を説いていただきましたが、次第にイエス・キリストを知りたいと思い始めました。次の安息日、妻の強い願いを感じ、思い切って教会の門をくぐったのです。広い礼拝堂にはおおぜいの方がいましたが、物静かで和やかな雰囲気は漂っておりました。私が今までにない幸せを感じていると、娘をよく知る皆様が心から歓迎して下さり、安心して妻と集会に出席することができました。

それから数日経た夕食時、天のお父様に妻の前で初めて祈りました。するとそれを境に酒、たばこ、コーヒーなどが苦もなく断てたではありませんか。これは思いも寄らないことでした。今まで何回挑戦しても誘惑に勝てずに挫折していたことを思うと奇跡に近く、神様の祝福と感謝しています。

その後宣教師や兄弟姉妹から教えを受けて約1カ月半後の10月18日、妻と私はバプテスマを受けることができました。それ以来、日々福音に基づいて得られる貴重な導きを家庭や家族の幸福の柱とすえました。1年目が経過して監督とステークス部長の面接も無事に終え、神殿推薦状をいただいた時はとても感激しました。そして愛する兄弟姉妹の皆様のおかげで、昨年の10月29日には東京神殿でエンゲウメントの儀式を受け、翌30日に夫婦と家族の結び固めの儀式を受けることができました。

しかし、この大きな祝福もむなしく

なるほど、夫婦の争いがたびたび起こるのには困りました。私はこれを契機に争いをなくすため、みずからを戒めようと自分に言い聞かせました。すべてに自分の非を認め、意見の押し付けをやめ、欠けていた妻への愛と感謝を心に刻みました。神様から恵まれた妻をないがしろにしていたことに気がつく、^{はんりよ}伴侶に対する妻の心もわかる気

がします。最近妻は落ち着いてやさしくなり、会話が和やかになりました。

思えばこのかけがえのない祝福をもたらす力になってくれたのは長女でした。長女は私たちの改宗と前後するようにながんに冒され、手術によりかろうじて命を取り留めました。私は神の厳しい試練を感じずにはられません。永遠にわたる幸せをプレゼントしてく

れた娘たちに報いるには、神の子として家族の長として真にふさわしくなることと理解しています。

モルモン経が真実のみ教えであり、イエス・キリストは救い主であり、神は生きておられることを証いたします。(ぬまた・ふみお ワード部日曜学校会長)

JMTC

3月に召された専任宣教師

第175期生 7人

ローカル



後列左から1-3, 前列左から4-7

〈名前〉

1. 工藤信男
2. 菅沼渡
3. 大野木利行
4. 平位薫
5. 瀬ノ口恵美
6. 中里シルバーナ
7. 高橋朝子

〈出身地〉

- 我孫子S/牛久W
 名古屋西S/犬山B
 名古屋M/福井D/敦賀B
 神戸S/姫路W
 福岡M/熊本D/延岡B
 東京北M/宇都宮D/小山B
 東京S/所沢W

〈伝道地〉

- 沖縄伝道部
 岡山伝道部
 札幌伝道部
 名古屋伝道部
 大阪伝道部
 沖縄伝道部
 名古屋伝道部

お知らせ

役員の変動

1994年1月27日から2月25日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 名古屋伝道部三重地方部
 新地方部長: 館義徳
 (前任者: 除村秀輝)
- 福岡伝道部熊本地方部
 新地方部長: 角屋光典
 (前任者: 田代浩三)
- 札幌西ステークス部篠路支部
 新支部長: 菊地敏
 (前任者: 岡村雅博)
- 札幌西ステークス部藻岩ワード部
 新監督: 馬淵進
 (前任者: 内海宏一郎)
- 高崎ステークス部熊谷ワード部
 新監督: 満岡俊士
 (前任者: 大橋正弘)
- 高崎ステークス部高崎東ワード部
 新監督: 天田和利
 (前任者: 松沼文男)
- 東京北伝道部新潟地方部三条支部
 新支部長: 丸山勝美
 (前任者: ALDEN RICHARDSON)
- 東京南ステークス部渋谷ワード部
 新監督: 前田修
 (前任者: 本多隆治)
- 名古屋ステークス部野並支部
 新支部長: 市橋弘彦
 (前任者: 塚原俊英)

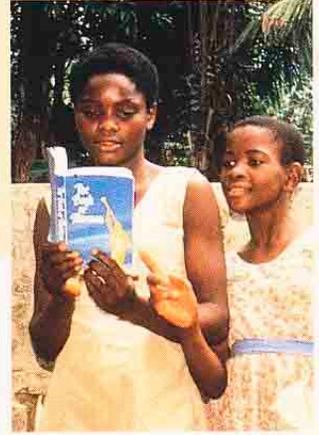
M: 伝道部, S: ステークス部, D: 地方部, W: ワード部, B: 支部



南アフリカ、ヨハネスブルク神殿

1985年8月に行なわれた神殿の献堂式における祈りの中で、ゴードン・B・ピンクレー第一副管長は次のように願った。「全能の神よ、あなたの忠実な聖徒たちが祝福され、安全に守られるように、どうか手を差し伸べてください。この悩める地に平和が訪れますように。……この地にあなたの神殿が建つことによって、どうか全国に祝福が行き渡りますように。」(本誌「アフリカの福音の開拓者たち」p. 36参照)

アフリカ



神 権に関する啓示が1978年に与えられたが、その何年も前から主はアフリカの住民が福音を受け入れられるように備えておられた。(本誌「備えられた人々」p. 32, 「アフリカの福音の開拓者たち」p. 36参照)

